

貞丈雜記

十一



73
6188
11



貞丈雜記卷之十一

式具之部

— 調度掛之事 ニテ系
 — うり不負ふ之事
 — 鎧具足之事
 — 着長の事
 — 腹當の事
 — 腹巻之事 ニテ系
 — うつば之事 ニテ系

雜記十一

— 長具足之事
 — 鉄炮之事
 — 昔具足由世具足
 — 昭楠脊板
 — 胴丸之事
 — つめき
 — さのろふ簾之事 図

目一



- 犬村小五郎の事
- 糸色の禮とある事
- 弓の事
- 鎧をたぬ事
- 履やふくぬの事 三ヶ条
- やり指しする事
- うつゝ報する事
- 弦巻弦袋の事
- うつゝの弦袋の事
- 尻籠の事
- やりあひの時の事
- 背の事
- 兵具は佛法の説き事
- 矢筈の事 二ヶ条
- 弓の事
- 籠は報する事
- 逆頬腕の事
- 幕の乳敷の事
- 武器は梵字ある事
- 手取明神々宝殿の事

- 籠は矢を盛るに於
- 甲冑をうつゝする事
- 楯板の事
- 首桶の事
- 履の上帯の事
- 細うすの事
- 竹尻籠の事
- 武善類虫はせきる法
- 古の胃うけ張 圖
- 同弦袋つけやの圖
- うつゝと云ぬやと云物の事
- 太刀は弦袋付の圖
- 軍法 軍術 兵法
- 武器は蜻蛉の形ある事
- 軍器を作る婦人を忌む
- 古の弦袋
- 禮を垂る事 二ヶ条
- さいもあるの事
- 後三年画の履の圖
- 同背の圖

- 同襖（図）
- 同袴類（図）
- うろねる矢のさ（図）
- 鎧のふちひ（図）
- 後三年鎧の櫛の事
- 旗面（図）
- 古具足櫃（図）
- 兵官者太刀は（図）
- 鎧（図）
- 鞆（図）
- 同義家胡弓旗（図）
- 水吞（図）
- かきしめ（図）
- 軍配（図）
- 同幕（図）
- 旗（図）
- 上腹巻（図）
- 腰小旗（図）
- 旗（図）
- 陣羽（図）

- 手鐲（図）
- 腕（図）
- 胃（図）
- 馬上（図）
- 町（図）
- 矢保（図）
- 志（図）
- 腹（図）
- 近世ハチ刀長脇（図）
- 近世鎧下装束（図）
- 乳縄（図）
- 毎慶の七道具
- 勝軍木（図）
- 古画の武志（図）
- 大臣大將鎧腹（図）
- 倭杖儀刀（図）
- 錦の旗（図）
- 鎧下の装束（図）
- 近世軍衣流行（図）

- | | |
|-------------|--------------|
| 一 笠あしゝのり | 一 蝙蝠付の事 |
| 一 獅子以胃のり | 一 龍以胃のり |
| 一 甲の字胃のり | 一 弓矢短小甲胃輕薄のり |
| 一 金胆包胆の事 | 一 武具のりをものり |
| 一 古平衣の襠のり | 一 襠の逆板のり 圖 |
| 一 武具は襠をきゝのり | 一 袴をれ事 |
| 一 小具足出まゝのり | 一 けしや袴の事 |
| 一 鎧の威毛 | 一 未濃と候とのり |
| 一 つぶ袖の圖 | 一 割小札の事 圖 |
| 一 袴小札の事 | 一 家上胆の事 |

- | | |
|-------------|------------|
| 一 母衣の事 圖 | 一 槍のり |
| 一 侍中間雜色軍装のり | 一 威衣のり |
| 一 白草威のり | 一 鎧札金銀朱ホのり |
| 一 矢筈頭の札のり | 一 諸具足事 |
| 一 腰さゝのり | 一 弓とり力のり |

以上

眞丈雜記卷之十一

伴勢貞友

千賀春城

同校

岡田光大

武具之部

一 弓矢を^{テウトカケ}置道具^{ミカサリキ}調度^{テウトカケ}拭と云道具ありは物
 東山殿^{ミカサリキ}飾記と云書は其陰圖ありあゝ云説あり然と
 我家は傳へる京都將軍時代の諸書は調度かけを
 いふ道具の名見えは京都將軍より後作里出
 してゐる物ありきと彼の^{ミカサリキ}飾記は濁しゝゝい心持なり

雜記上

一

吾事^{ミカサリキ}は傳へる
 由修^{ミカサリキ}記は調度
 拂の^{ミカサリキ}陰圖あり
 外敷^{ミカサリキ}本^{ミカサリキ}あり
 は調度^{ミカサリキ}かけを
 調度^{ミカサリキ}掛の^{ミカサリキ}紙人
 の^{ミカサリキ}才^{ミカサリキ}あり
 後名^{ミカサリキ}と^{ミカサリキ}記す

吾我知存蔵倉
 取箱根の系譜の
 多し左太の考
 刀三行は分るひ
 調度人より
 するはあふ
 とあり

調度掛のり
 調度掛同著
 云書に記述

後世を好む人の如く作り出して調度懸と名付る
 を後の人作記(かへし)圖(た)る鎌倉時代より
 して京都將軍時代と調度懸と云ふ道具の名は
 あつた將軍法系内以外の行糖(キヤウダ)を
 の器量阿者(ア)を撰ひて將軍のはり矢を筆をむ
 役人紙調度掛といひて東監以外足利時代乃
 舊記をえて知(ち)か(か)のり矢を道具と出(で)来(き)
 あつた外は名(な)を(を)り(り)調度懸といふ級の名あつた
 上(う)る(る)道具の名を調度懸といふ名付(な)す
 する(る)覚(さ)ゆ(ゆ)

一 武書(たけしよ)は云文(うん)明(めい)年(ねん)中(ちゆう)太(た)田(だ)道(だう)灌(くわん)上(じやう)洛(らく)の時(とき)將軍(きやうぐん)義(ぎ)政(せい)公(こう)の對(たい)面(めん)

有(あ)り調(てう)度(だ)掛(か)家(け)の傳(でん)り(る)お(お)こ(こ)る(る)べ(べ)れ(れ)書(しよ)記(き)一(いつ)進(しん)上(じやう)と(と)言(い)ふ
 由(よし)作(しよ)り(る)と(と)れ(れ)調(てう)度(だ)懸(けん)の(の)る(る)部(ぶ)指(さ)し(し)と(と)れ(れ)何(なに)を(を)る(る)か
 上(う)へ(へ)き(き)志(し)る(る)愚(ぐ)意(い)を(を)る(る)さ(さ)し(し)と(と)道(だう)灌(くわん)の(の)歌(か)

武丈重て按(お)るは
 道灌の調度掛
 のあ(あ)つた後(ご)人の(の)傳(でん)
 作(しよ)り(る)と(と)る(る)道(だう)灌(くわん)
 はあ(あ)つた人(ひと)の(の)傳(でん)
 げ調(てう)度(だ)掛(か)の(の)書(しよ)
 書(しよ)つ(つ)てあ(あ)つた
 天(てん)知(ち)ぬ(ぬ)人(ひと)の(の)傳(でん)
 あ(あ)つた(と)り(る)

矢(や)を(を)り(る)と(と)左(さ)太(た)の(の)り(る)を(を)調(てう)度(だ)け(け)其(その)の(の)あ(あ)つた(と)り(る)は(は)あ(あ)つた(と)り(る)か
 と(と)も(も)と(と)系(けい)を(を)る(る)と(と)て(て)歌(か)は(は)矢(や)を(を)り(る)と(と)云(い)ふ(ふ)部(ぶ)は(は)矢(や)を(を)
 する(る)と(と)左(さ)太(た)の(の)り(る)と(と)右(みぎ)太(た)の(の)り(る)と(と)い(い)ふ(ふ)役(やく)と(と)い(い)ふ(ふ)其(その)の(の)り(る)
 も(も)と(と)云(い)ふ(ふ)調(てう)度(だ)懸(けん)の(の)役(やく)人(ひと)部(ぶ)は(は)矢(や)を(を)り(る)と(と)い(い)ふ(ふ)り(る)を(を)
 持(も)ち(ち)と(と)右(みぎ)太(た)の(の)り(る)と(と)左(さ)太(た)の(の)り(る)と(と)い(い)ふ(ふ)其(その)の(の)り(る)と(と)い(い)ふ(ふ)
 役(やく)人(ひと)の(の)む(む)と(と)る(る)も(も)其(その)役(やく)人(ひと)の(の)む(む)と(と)い(い)ふ(ふ)と(と)い(い)ふ(ふ)

二三千ナケ出シタル
日本兵多ク焼
口サレキドヤケラニ
火モツキテサケ
スレマデナカリケリ
云々此鉄炮トアル
ハ今ノ世ノ鉄炮ニ
ハアラスホウロク
大矢ノ類也右支
承年中ノコロ日本
ニ未今世ノ如キ
鉄炮ハナカリシ也

元太記第用集等々見えたり永正天文の頃の事也
大将のめくねを^{サベツ}澄と云徳士の名も或具足と云と見え人
あま^{サベツ}此とも痛記ハ云と見え澄の事も具足とも書
てあり腰巻とも具足と云と道照愚草ハ云腰巻或
書状ある具足と書い悪く具足とい糸の如の^{サベツ}見え
或ハ腰巻の具足或ハ袖の具足ありと云と見え
領とい誤れの由や智も云具足といと見えこれと
いとも何れもかこれと見えかわけの^{サベツ}見え具足と云
集巻の具足と云と見え太鼓^{サベツ}外と見え
村の具足と云と見えゆけ^{サベツ}と見え^{サベツ}の^{サベツ}見え

くあり是も樂の具村の具のそふり足跡を云某
みく澄ハ袖籠^{コテ}子^{キウビ}尾梅檀^{ヤシダン}の板^{ワイダテ}脇指^{スチ}脇當^{アテ}など
取揃へて具^{サベツ}り足^{サベツ}る具足と云ありと外のおもひ
の具足とい澄をいたし具足とけつりいなり^{サベツ}の
半を調度と云と見え調度の事ハ弓矢の類ハ記す
一昔具足當世具足といふる旧記ハも上古の澄ハたの
口も合も^{サベツ}て脇指をあて^{サベツ}右の脇をあて^{サベツ}揃へ
そと^{サベツ}當世の具足といふる頼仁年中の^{サベツ}脇丸の
ことく^{サベツ}右のあて^{サベツ}揃へて脇指を用さる^{サベツ}云々細
ハ軍用記と見え

向の神を^{タレ}付く又同卷十九文寛癸心之系盛遠紺村濃の並
垂は黒糸威の腹巻は神付く同卷廿四南越金掲の表
垂は崩黄の腹巻は神付く又参考太平記少貳頼高の
黄威の腹巻は同一毛のつまとりて神付く是よりなる
是皆腹巻の神ありぬある如様の神をとりて付く事を云
也近代の腹巻は神ありも有り
ははるぬきともぬきとも六大将の比皆の事と大将あり

とも常の金つゝあきとてつゝぬきとも云
 やすといふ不と云い竹と紙ともあまを揃てゐぬ
 たともその毛皮のけともい大和のむとにいすす騎馬
 不と云いやすといふ日本國の惣名は毛皮うけといふ唐めき
 たる毛皮うけぬをバ大和といふ不と云いされはといふ毛皮
 うけといふをうけうけ不といふぬ
 うけ不れと云い征矢の子に征矢の耐いありといふを
 揃へうけの耐いまけつを揃へて遠斗に依り暇
 まいりぬともいふ不のこの耐いまけつをぬき征矢
 の耐いありといふを揃へるを是は一院の器候といふ馬

礪川道標作始
 故道標うつ不ト
 ヌト云説アリ用
 こが々シ

故實は見えうり 的出張記は云うは不のことなり
つう不の子とハヤサにゆき 空穂はさす 征矢をうり 不のこと
をく たゞ 征矢とさうり つか服はさす 征矢の事なり

一
う
不^フの子^コとやハ齒^ハ梳^ハハ
齒^ハ梳^ハと云
太刀^ハを^ハ之^ハ秘^ハ有^ハ之

と能出強記は何う、うすの内
小太刀を入る事

と法^ハ知^ルはかる皮を^ハうけはと^テ下^リを^コづ^ハと^クす^ル
と的出張^ハありやうが^ハ穂皮^{ホカハ}と穂皮^{ホカハ}と^ハつ^カず^キと

びひやうと云う海もあり大なる物之穂の形を布と紐
 又いつら後まで紐の形を大サ一の元就と稱する所
 物もあるす久し好むる物之穂の形土俵に似る故の名あり

又努瓢とも書くたふき扱へ近代の物也

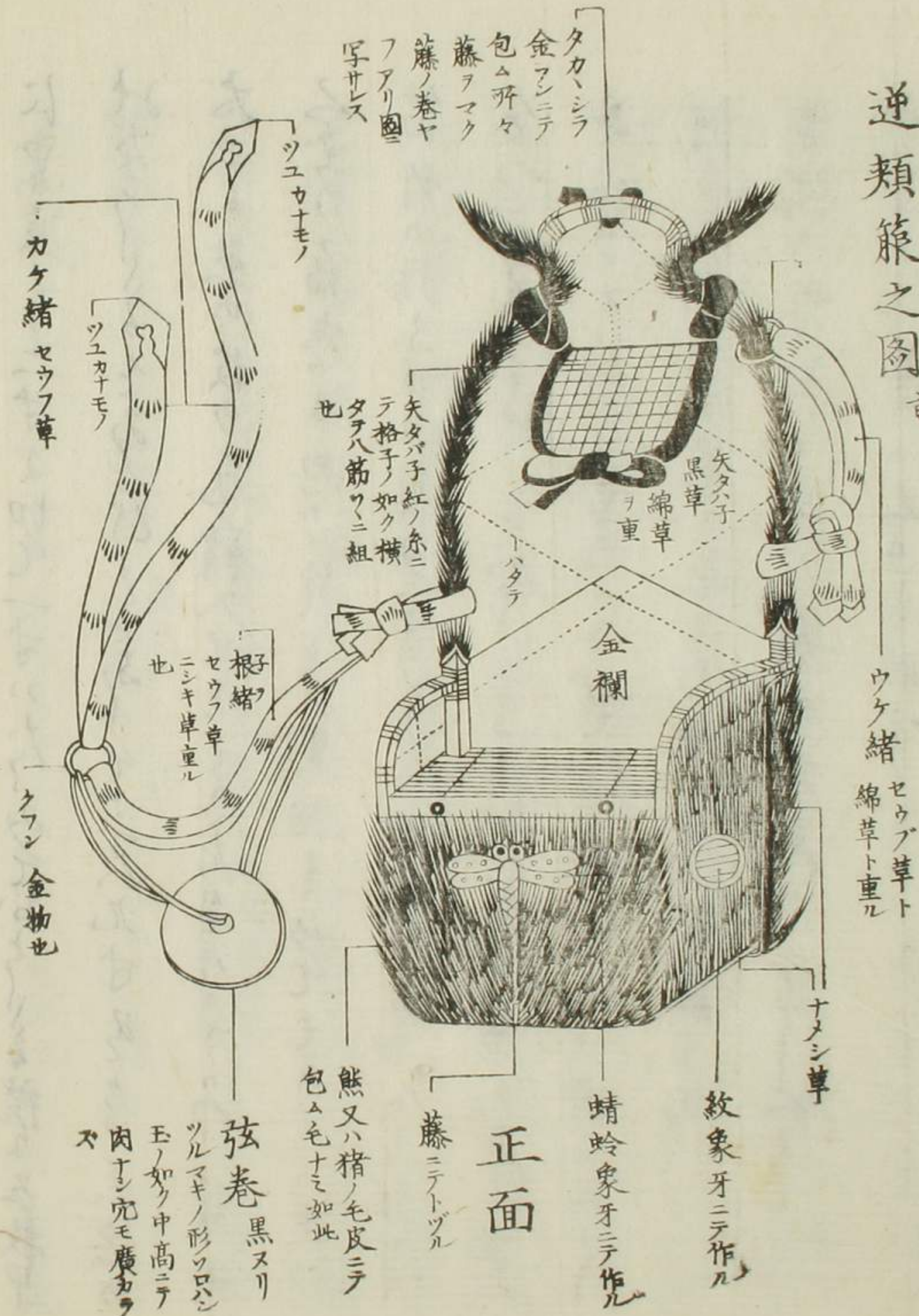
さゝ^二船のり^三とハ^{モロ}遅煩と云く古ハ大将也

重慶の弓を持逆頰の服を負へしもの服一名式正の
 服とも云奉式の服とも云ふことさうな古代の服あれ今
 の世は絶てぬ人ありさうな衣々の服の元祖也古態
 の逆頰イの逆頰とて二品あり熊の毛はまて包ふれ
 と野狐イシの毛はまて包ふれを云けこの獣の皮を用ゐる
 ことともありまひさけしつゝも獣ありし軍陣にハ
 つけしつゝもきをぬむるものあり用ては服の前の正
 面は晴蛉トンボウの形を象牙ゾウゲより作りし物なりとんわうと

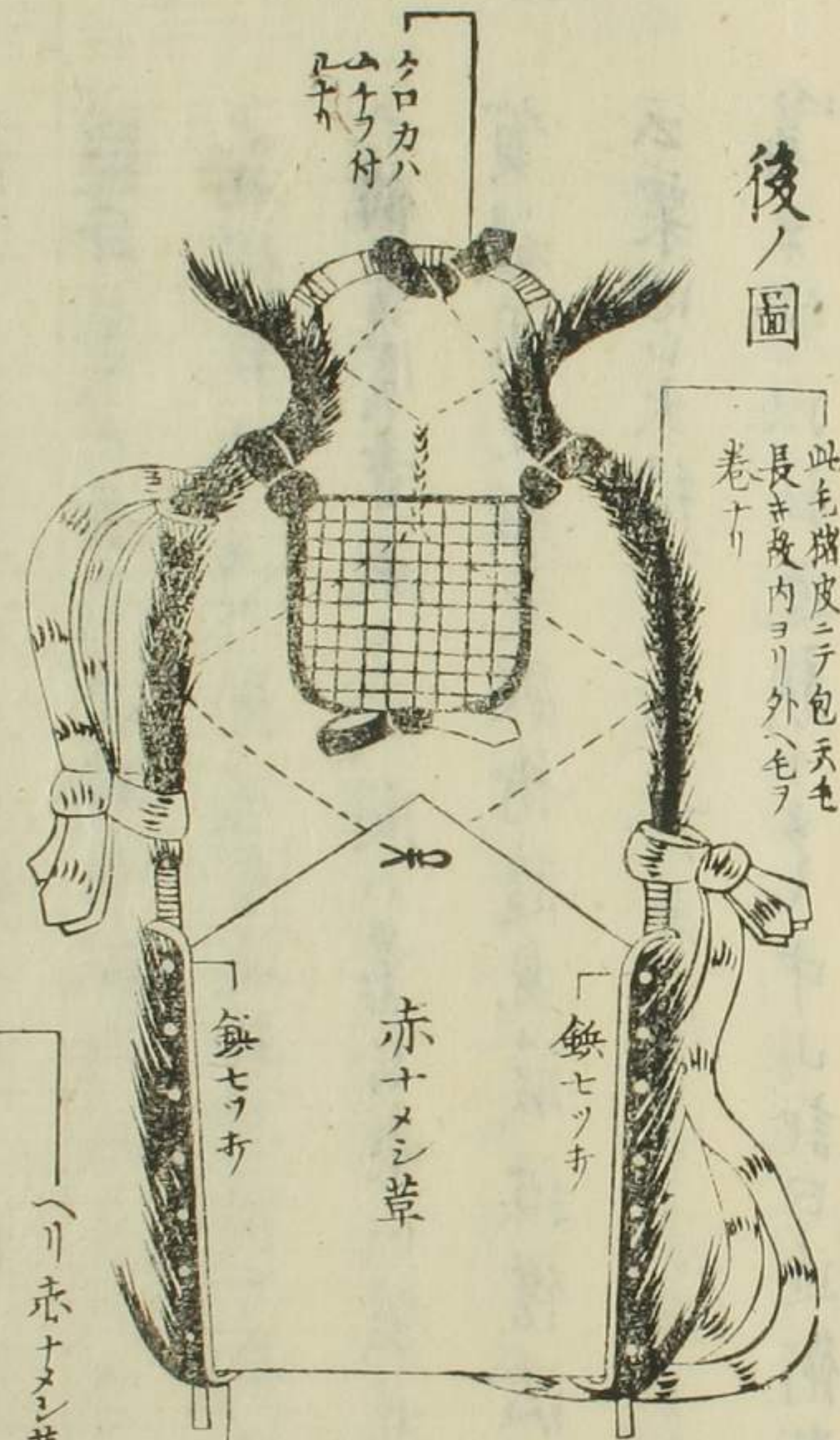
わづのりこ獣のわづをさうてさういふはあまた又或説は
さうつうハ虎豹の皮又ハ牛の皮を色を鬼の顔を
腋の正面はさうさういふなりけり云又さうつうハ袂
葛とすて細き葛とて纏る腋へあそ云説あり
何れも古代のさうつうをつる見ぬ人指骨の説
也是等の説用るなり又或説はさうつうハ素衣
とすて白き衣とて巻る腋へさういふは素衣とす
ハ白き衣のなりけり義経記卷の五忠信吉野
合戦ノ条は云そのいひ
六尺さうあるは腋横川のいひ
と云は腋もいひて衣をさうなり
ぐあやうぐいもさうさういふなりかろんの事

に黒草を二寸と切て一寸いたみておといる襪は五枚甲
地たのいふをさういふはさういふは二尺九寸さうなる黒草の
太刀の熊の皮の尻鞘入てもさういふはさうなるさうなる腋矢
ふさうなるさうなるなり黒羽を以てもさうなる矢の
笛竹の指ふさうなる笛さう上中四束なるさうと切る
をつさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
何れもさういふはさういふはさういふはさういふはさういふは
古代のさうつう腋の圍大方たのさうさうさうさうさうさう
ハ小き襪はさういふはさういふはさういふはさういふはさういふは

逆類簾之圖

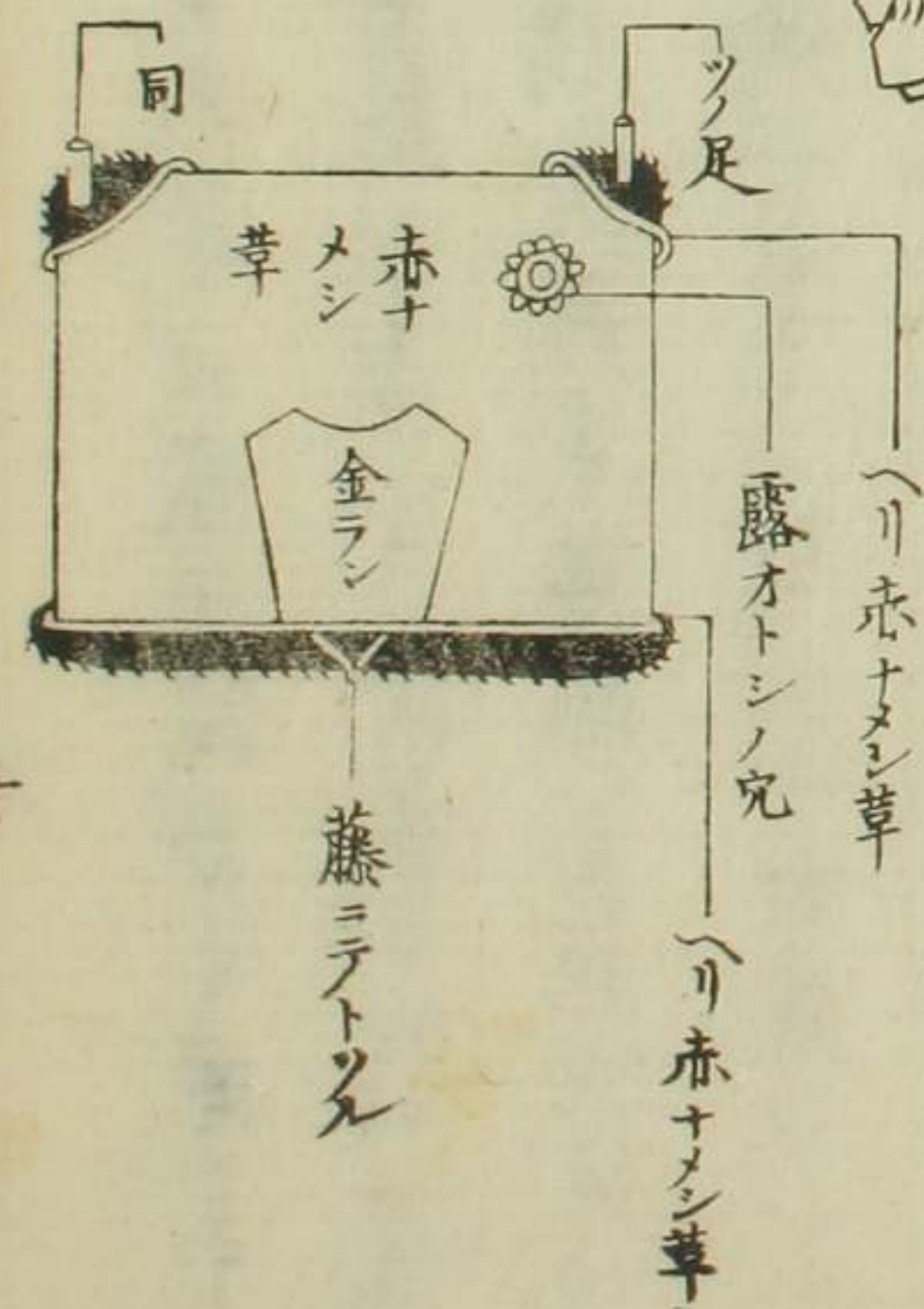


後ノ圖



猪皮ニテ包ムニ猪皮ノワタ毛ヲハ皆メキ去テ長キ毛ハカリ、殘シテ其毛ヨ一筋ツ漆ニテ黒クヌリテ包ムナリ

底ノ圖



艮ノ字ヤナ
 クイトコム事
 本也エヒテトヨ
 ムハ中古以來
 ノ事也

松籠ト云ハ桺
 コリノ如蒲桺ト
 云モノニテ組ミ
 タルモノナルヘシ
 隨兵日記云おひ
 そヤハ廿五本ナリ
 へ又ハ廿矢モ十
 六矢モ有テス
 ひの多クハるの
 云のきくつ服
 ありてハ從兵
 矢十六矢の時ハ
 是式の服ナリ
 下ニ云
 軍中記云ハ服
 是の如クハきくつ
 ありてハびちをハ
 ありてハきくつ
 ありてハきくつ

事被示入て隨身服者諸衛態服也而家例用狢皮是
 櫛録人上下脇隨身共用狢皮取渡件服之辭也
 貞丈云此照念院の装束抄逆顔トあり類の字を誤て
 顔と書るゝ然又つ不の字抵牾ありとも云ぬ款の字を
 用らるゝ死ありて職人等款合の陰服は之の初書
 ともいふ所ののあき初は柳忠ひうはす款とあり是又古
 公家にも用ゝるゝ服ありぬ款合のものぞこれ一様
 下鎌倉年中行事と云ふ方振武後向とあり中書
 涉矢切符の服逆類と又馬具すは記は云大將軍
 中門へ出て太刀をもき又矢をも負へて服ハ逆類なり

一 小^コ子^テハ犬追物の時をうさすゝされハ犬射ふ多と云ふ等

小千屋ゆき小千あき
 云物ハあきと屋ゆきハたをき
 をりて村々と笠然ハ弓子の神
 といふを承てゆき經
 へすと笠然やゆきハ龍子さすりあ

④のけを^{テフクロ}袋と
 みるやぬまの耐え
 かきうくる事

弓馬故実又足元をり
屋敷の又下へて鎌倉時代
又ハ子袋と云ふ脇の又末あり

糸毛の襤と云ハ
膳軍馬先服
記アリ
糸毛のおどろい
襤之草おど

いと草を細たてえおとくは隈もある故に水は封
く糸毛の證といふは毛とハ毛引と糸をさきとあり
きそ毛おのちう入たるやうありておとすし

鎧のおとゝ毛ありありの説ありあやまりあり
おとゝ毛のふいふと軍用記は志々す習このふいふ習之

階のり、袖の方、すきま云々、庭のり、あとの所々、留のつゝ
 もも草をいへるなり。男入道も、半いつれも、うらから
 す、袖は具足、松傳ふ云々、昔ハそれの可なりとも、草の留
 をいへるなり。いへるなり、いへるなり、いへるなり、いへるなり
 と同じ草をいへるなり、いへるなり、いへるなり、いへるなり
 かたなり、いへるなり、いへるなり、いへるなり、いへるなり
 いへるなり、いへるなり、馬の上留も云々
 あさい、留のり、調子の歌、いへるなり

今此世の文藝之圖
 其形を以てあらわす
 あらまし



時徳王を以て

屍龍 又笑菴

の事あるにきこしう前よりよく古き

若くして云ハ
 鞭ユキのるを志して云是ハ同族の相あふなり

あて懸名の如いひくも
鞆服と志すは同物あり

別物太平記巻訓性来又服と
鹿部訓日記う古へ

展覧といふ物と今志といふ物とハ別物なりト在画ニ

今世の志をわく物原へ徳は一日見す望みなり

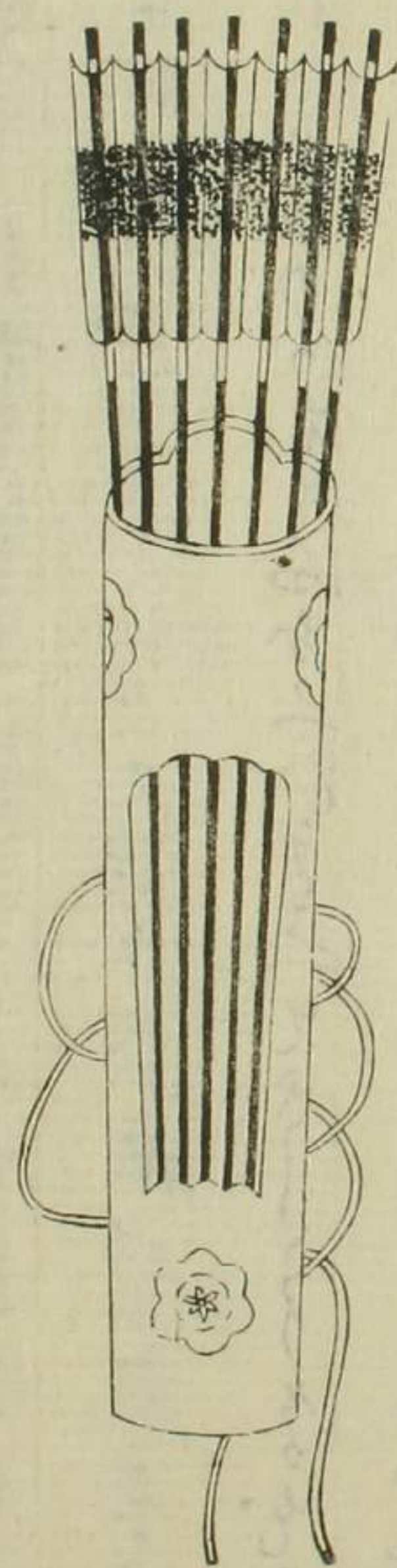
ほつ暗又つやふこの真ひ 神のみえぬをこゝ

子履新矣以新為重
重乃其本也

とて美ハ矢立壺と書レ壺ツボ胡ヤナ録グイの一名を云くあり

○壺胡必錄之圖

装束図式を以て光大輸入之
公家と傍府の目され負あり



太平記三藤房
通世ノ系二海

人ノ面ノ羽付夕
ル平胡ハ孫ノハ服

ヲ負トアリ

○東瀛卷十二番
長恭兼平反
狩胡孫由々

腰エウの字をへし
 へ屋あゝあゝよゝゝり
 深嘆う和名抄了

えうあひとむい後のまじやあらむとあひなり

遠くより来りて大新の如く物之
但し不_レ要_レく爲_レハ別_レ

平やあくるハ多ひうな
似たり
壺胡ハ將平胡録公子ハ用る
わくハ其孫ハ北衣未園或ハあり

三依一統は志々々ある志を願ふとありけりや

をばつまひあゝぬおしゆひを割のき草まてはぐさや武と
と心惜る人もあやまりこと草まて こと草とい割のき
の草と云ふなり
ゆびをつくすき中射を具之必傳はる元なり

一 エミラ 能く教さる軍中記は云服をぬきといさうろあう

教さるよりの方より教さるすこそさうろの能はむろ
をさするもて身家とい身は付方之能のうろの方
能はふのき教は得同記はあり 能はむろささるひ
言上の時のなり

一 うはがのふは教さるすき馬は実云馬よりうろ
のふは矢 ビドカ 矢はさるすきり教は二二もきたへ但家元
ハ一うさうたるもすき人ハ一うさうたるふうたるやこ

教を身家よりして矢はさるすきりうはがの
ふん中より教はさるすきりうの付はもやう又この
付はもやうやハ一の付はもやうすきり又矢はさる
きすきり教はさる付はもやう教はさるすきり
やうするも又矢はさるすきりうのふはさるすきり
ゆはさるすきりハ一但家元ハ一さるすきり
上はさるすきりハ一はさるすきり付はもやう矢はさるすきり
サカツラ エミラ オヒヤウ
逆類能の負教服を背のふの服はありあてかけ結を
たの肩の上より前ハ一さるすきりふの服の下ハ一さるすきり

結は通してふの服は結はさるすきり付はもやう
さるすきり結はさるすきり付はもやう

弓馬被美三股ハカの
 ぎを張来ま令指
 は肩を仰つ時ハ
 ちけを虎の肩上
 まで上げてうけ張
 通し張る張巻
 方の股下よりう
 いさや張巻のあ
 ころあり

めは肩の肘ハける巻いたの肩のより後「下」新て面白
 布を十握の帯のこころたてては服の手の下の方へけ
 て腰よりひきわたす 藤倉年中行幸はは服逆類以上帯を
 上帯あき用へたはは紐張あき
 張巻ハ張を巻きあきおへ今もふくちうはあき
 作りあきへ古ハ皮をも作りしこふちうは作り
 草のこきりて作れへ今の張巻ハまんぢうをこころ合
 だめ丸あり 古の張巻ハ算盤の玉のごとく杉形
 のやうなありし中の穴もせうしその穴廣さ
 ツルフクロ
 張袋と云ハ張巻のりく古ハ張袋といひく古ハ袋は
 てあきおきも袋と名つるおへ尺袋ハ素檀を作る

清國より
 所蔵の書

公家ニ用ラル魚
 袋ト云おも箱ノ上
 ノ鯨ノ皮ニテハリタル
 モ也其上ニ金銀ノ
 魚ヲ作り付ルハ腰
 ニ付ル飾也
 家作ニテヲ入テ置
 所ヲハ袋ト云也棚
 ニ襖障子ヲ立テ置
 テ袋棚ト云袋ト云
 ハ物ヲ入ル惣名也又
 鷹ノ餌袋モ縫タル
 袋ニ非ス龍也
 うつけもつる袋
 あうこれハうつの
 もつるのうちは付
 るは袋これハハ
 うつの張袋とい
 ふ

箱あれども尺袋と云類形新用抄に見えり
 近代まで張袋と云ハ張巻のり也知るる今ハ張袋
 とつる物を張おき終へ作りて用れハ誤るたカハ張袋
 付る年平家おき太平記等に見えり
 幕の乳敷ハ二十八也是二十八宿のりくく成説陣
 幕の乳敷ハ二十八宿の内牛宿を除く廿七なり
 其有ハ牛宿と云星ハ天の丑寅の方より何れ鬼門
 ある星ある星を除くところ真丈云牛宿を除く
 とのハ近代の説し用へる古法ハ牛宿を除く
 東條のりハ乳敷以外のりも廿八宿のりくくあり

東鑑卷之九二六此
旗三浦介義隆
為御心 義隆在世
別軍方六三すに其間
日可令を持之由被仰
はた

老れとも牛宿を降く半ハあ幕はかきうて牛宿
を降くものもれあきなり

うは不のかわどのゆこの内は半とて袋を作るとありけ
けあをばの袋とていば袋は勢はるを入ぬ又人

中手をも入をきく 弓馬あまうる袋はうつあふとい
けるは防軍のあふの防袋といひ

旗幕扇周府あきなり 梵字又ハ佛名をきき出ぬ

か接ぎうせて用る軍中言ひ其のほは け佛を

用ぬハも道奥を貴くす人きうるて天下の人勝る

人ハきうて思ふ人ハあ 愚人ハ佛を信作も

大將佛を用されハ愚人の心はあふんばあふんばれ

そむ心出まふハ佛法を用るハ愚人をつゝるあ
方はし賢き大將ハ佛をつゝひて謀のたすけ

愚ある大將ハ佛をつゝるて謀をもあふんばれ

ほうの佛をつゝるふとの是別を味ふ

一 屍籠といふお上右ハきく前もあふんばれ

物あふのあふれハきく惠法平のな訓徳来下家集

盛衰抄あふハ屍籠の名えハあり 腹ハ屍籠ハ二

はきたり 太平記も人のとき接ぎハ 腹竹屍籠ハ

接ぎハうり集ハハきく又言忠やき

うは不の事 中畧 腹夫籠あふいハきく

義隆記はあこの
さきさうふあひ
あハハハハハハハ
按ルニ古ハハハハ
あハハハハハハハ
義ハハハハハハハ
ハハハハハハハハ
ハハハハハハハハ
今ハハハハハハハ
ハハハハハハハハ

追考
屍籠ハ今世のちと
トハ別あり矢壺下
書て壺胡錄のコ
ト也此考別三冊
ありと云々

有りあり是亦も腹と尻籠二つは書こり 尻籠は東鑑
にハ見えずに存例ハ見あり鎌倉時代の書と云ふ
元弘建武以来の比より尻籠と云物を用ひし物
ありしと云ふも今の世はあれ尻籠と同じ物に
おつたかとの製作と云ふよりいふ古物を見ず
下總國麻崎郡香取明神の寶藏は上古の腹
あり書ぬり腹と矢たむ手の草とありかゝるも矢
ふむりの筆とあり是ハ祖傳の矢をある書て矢を
同祖傳も矢たむ手を云ふ太平記は矢たむねといふ
と云ふとありはるにけ腹は矢たむ矢たむと云ふ

新古代の繪師のかきける武者の負ける腹の縁と一同なる
 也腹のつらゝ矢たどまの草をあらけかりしを付け矢く
 むりの簀をを作るハ矢がふむつつきおこ代りの中
 古以来作^{サシイ}りたるおこ高忠の繪詞記の証矢のさけ乃
 圖を以て考れば京都將軍の比もや矢くむりの簀を
 腹のつらゝ矢たどまの草をあらけ又簀くむりのかりしを
 作すハ根くむりの簀を作るハ腹ハ組縁を別
 矢がく矢たどまふむりハ不及之を括の腹ハ組縁
 矢たどまもこれハ見ふハ見ふあきも矢ハぬき
 ぬきとぬき組縁も矢たどま矢くむりも矢ハぬき

けねの草もかうも根もろくもあき藤はすもくきけ二おの
むねをいひやの藤はえをわももすもろくあ

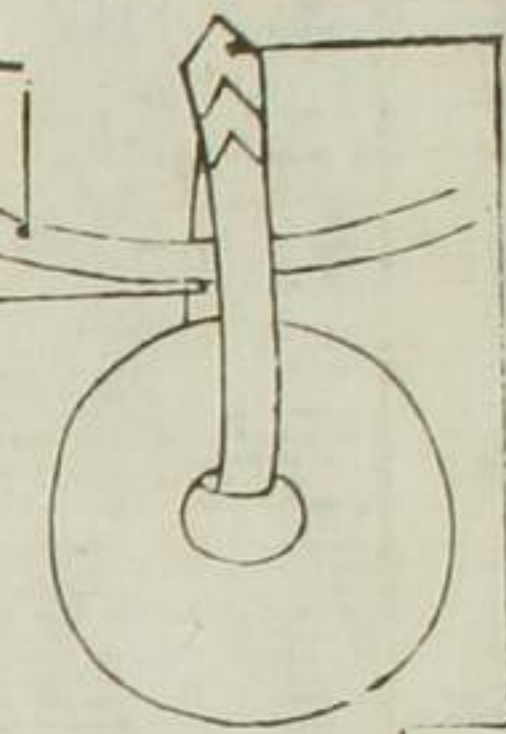
一 武説は古はうはと云ふのはえをさうたるは藤を作りて
かけいゝぬろふと云て真丈云武説はうはと云ね古は
はいえに古のうろふか補うろふかの
まろをすもろくぞのうろふを
昔の人ばさくけとこのうろふのゆ作りあゝるゆ多賀
真忠さ書えんえうろくと云ねのうろふえす

一 禮をさる本をさるゆ云ね古はうろふ保えぬ語は武者
所記以下甲胃をさるゆひろ矢を帯もろく又同書
こあけある男あゝひ甲胃をさるゆいゝ兵云平治物語

よ云甲胃をさるゆひろ矢を帯もろくあゝるゆいゝふさ
曾我物語は後陣のささの武士はつちうをさるゆひろ
矢を帯もろく隨兵上下はつちひろ

一 太刀は弦袋ひもきのうろ付りハ草を細こ載のりて弦袋は通一
こあゝるゆいゝふさ太刀の帯もろくをさるゆ太刀をさる
弦袋ハ太刀のあゝるゆのちふろろく真昌記は云つる巻
の草のひろさふろろくかめれろくつけ傘かさかゝる
ささかゝるゆいゝふさ二つのささあゝる金ハ亀甲ハ成れ祝言
也太刀をさるゆの延生の時はささのサゝ太刀をさる
ささろろくあゝるゆ祝言也

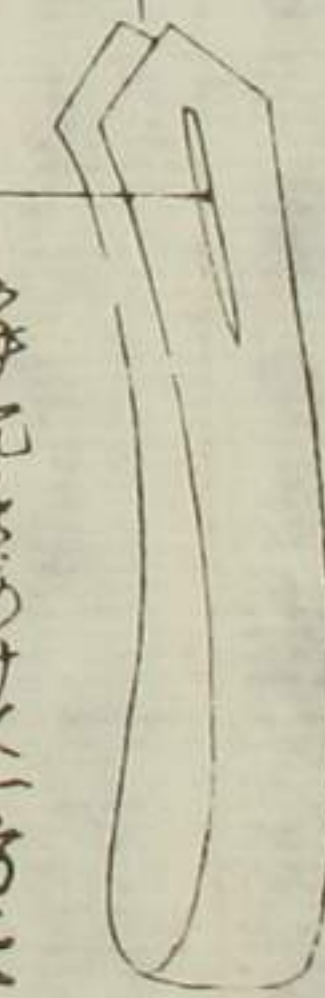
○弦袋 弦袋の緒と図



「はるかめ入れをもちてくら入ふ定をあげあふ方
たふひはくらもちて海りのきり草のこころをきりお
あ方のさきあふきりあふ方ひのけへ亀甲の形をく

はるかめ入れをもちてくら入ふ定をあげあふ方
たふひはくらもちて海りのきり草のこころをきりお
あ方のさきあふきりあふ方ひのけへ亀甲の形をく

弦袋緒



はるかめ入れをもちてくら入ふ定をあげあふ方
たふひはくらもちて海りのきり草のこころをきりお
あ方のさきあふきりあふ方ひのけへ亀甲の形をく

捕の板をもちて
とらふ古記共
足えさうゆき
あふきりあふ
あふきりあふ
あふきりあふ

古ハ金銭はるばるして鉄炮はあうりくされの捕の板
捕板をもちて矢遠るるあうりくされの捕の板
けきあふさうゆきあふさうゆきあふさうゆき
あふさうゆきあふさうゆきあふさうゆき

軍法と云軍兵の人数の組合より旗貝鐘太鼓木の金

番の定めて軍中の法度法武の定法をく

軍術と云敵をくわすきあふさうゆきあふさうゆき

兵法と云軍法のるく劔術のるく兵法と云あふさう

也
以上三ヶ条武具のるくあふさうゆきあふさうゆき

ふび桶ハ口けおく
首を切り入るおく
又行罷り首を

入る行罷り首入るる保元おけは見えさう

證の後ハあげきりおけは神のあふさうゆきあふさう

老ハゆひけりハ神のあふさうゆきあふさうゆき

よとのあふさうゆきあふさうゆきあふさうゆき

と云虫ハあふさうゆきあふさうゆきあふさうゆき

軍大田武若は清野
をかりハあふさうゆき
あふさうゆきあふ
あふさうゆきあふ
あふさうゆきあふ
あふさうゆきあふ

いすゝめのふり用る
旗竿も是れなり結あり船も
是れなりそつる何れも同意に
神の徳を水の玉の子とて
アケマキノる
あかきとんぼうハ水の玉は括ひて尾まで水をむね
ありあへ
もく水うけはあけきずる事ハ古ハ世々
明珠が虫の新作と不用し
弓袋或ハ大鯛の布ヌソカハ皮をあき十九と云布として作るも旧記に
見えず十九の布の事小神祇の類に記載を見考へ

鎌倉年中行事
 江館逆頼ウ上
 常川抄ニ云矢ニ
 ツタル上帯ノヲ
 紐タスヘシ長サハ
 八尺斗ニスヘシ云々

雜記十一

建元軍器
軍神を勧請
するところ
上よりハあ
るものゝ昔
は

イトヨク
幕旗の布帛ハ婦人の織る物なれどもこれハ又なる儀
と云心し月を照して残はひたりと云残は利刃をぬく
ハいふもの名劔も残はる物と云唐の荆川のありと
清も月あけの機をさしひと云
細うづ不と云ハ騎馬うづ不のものと騎馬うづ不とハ毛は
うづ不うづ不の半と
一うづ不と云ハ騎馬うづ不のものとうづ不のうづ不と云
やうと云うづ不と云ハ中へ入るものと清和院之記のあり
つねのうづ不とハぬりうづ不のものと騎馬うづ不と云ハ

毛はうづ不と云

一弦袋

今ハまう

江州水口細工の葛とて紐するを用ひ

古ハ革とて作りしを左右兵衛尉ハ赤皮左右衛尉尉ハ

藍皮のつる袋を用ひしを源平盛衰記ハ又云ういため

はとて地を修る赤皮藍皮とて紐の色むぬへ

一たうと

手あね海

といふ

竹尾筋之即針眼

太き針を

のやうな作

又一説ハ

鷹尾筋之鷹の羽の末をさし

鹿角をさし飾抄ハ清府源氏常陸尾胡切文

肩ハ鷹胡筋可也と云又今昔物語ハ常陸の胡筋

ハ雁侯のうづ不ハハ紙矢四十斗ハ又源平盛衰記

光武曰槐林記
 二五系安元四月
 二日晴武官陣
 衣之事直垂ハ以
 蜀紅爲勅免餘
 在關外之權云々
 按此時鑑直岳
 ノ制度ヲ始テ立
 ラレト見ユ蜀紅
 ノ錦ノ直垂ハ勅
 免ニテハ着ス
 ル事ヲ得サリ
 錄在於關外之權
 トハ關外トハ京都
 ノ外軍中ヲ指テ云
 也餘トハ蜀紅錦
 一アナル東京錦
 倭錦ノ類云蜀
 紅ニテナル錦直
 垂ハ勅免ニ及ハズ

軍中事大將軍
 心ヲカセ二諸侍三聽
 ス事ヲ云也右武
 器考證二見エタリ
 槐林記ハ後徳大
 寺實定卿ノ記也

鍵ノ柄又ハ矢ノ
 尾ナトハウナキ
 成ニテモ内ニテモ
 フレテ以テ又クヒ
 置ヘシ虫ノウナ
 ○又グハレヌモノハ
 フスベタルカヨシ
 フスベラレヌモノハ
 ヌクヒタルカヨシ

一 鑑直岳の色ノ多ク平治勅信特賢門 在東ノ佐重盛ハ平治
 廿三今日の軍の大將あれハ赤地錦の色無クハ平治勅信
 テ平治盛衰記保元勅信平治勅信ハ平治勅信ハ平治勅信
 人ハ十ノ九ノ色ハ赤地錦ノ外ノ色ハ無クハ平治勅信
 あらぬ人ハ錦ノ色ハ赤地錦ハ平治勅信ハ平治勅信
 こも實盛ノ老後の思ハ出テ宗盛ハ平治勅信ハ平治勅信
 の勝の色無クハ平治勅信ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信
 鑑直岳ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信
 あり又藤田系子ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信
 を平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信

一 のくまハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信
 くまハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信
 跡ヲ拾入ルハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信
 日記云大將先ヨリハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信
 織付ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信
 草ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信
 虫ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信
 虫ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信
 の虫ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信ハ平治勂信

慶訓往來下学
 集族囊抄系系
 往來下学類モ
 サイ又サイハナ
 ド、云々字無之
 小笠原元長ノ
 隨兵日記ニ毛扇
 ノコシラヘヤウハ
 有リテ團扇ト
 ガイトノ事ハ無
 之隨兵日記ハ文
 明十八年ノ事也

八重より久遠あるものなり

一 さい 又さいとも云 と云 古ハ今ノ年ノ戦の如く家町殿の

代はあつてもさういふ年盛衰記年表おぼえ

物語平治物語東鑑太平記等ハハナハナに記す

の書ハハナハナ九年後三年ホの徳義おぼへ

又えす 甲陽軍鑑ハ源頼義朝臣来さふを財羅

三郎ハ孫ハる也ええれとも傳へ又高氏御佛家の

拂ふなりとて作らるゝと云ふ又傳へ信長ハ

らずさいハ武田信玄の家を作り始りあり

上吉の法式とありまづハ信長通のあり山崎ハ

まづ道具とさいと名けり竿の先ハ細裁と云ふ

糸ハひきてそれきりて簾をつくるは簾の

道具より思ひ付て軍にさいを作ると成る

一 古ハかざと云うけむりあるも作りあるも

うけ張あるハ馬のこゝわがとのさう

を布とし十文字に結ひてうけあり

馬のことと十文字結ひかゝりて

兼倉實朝公時代ハ画師也

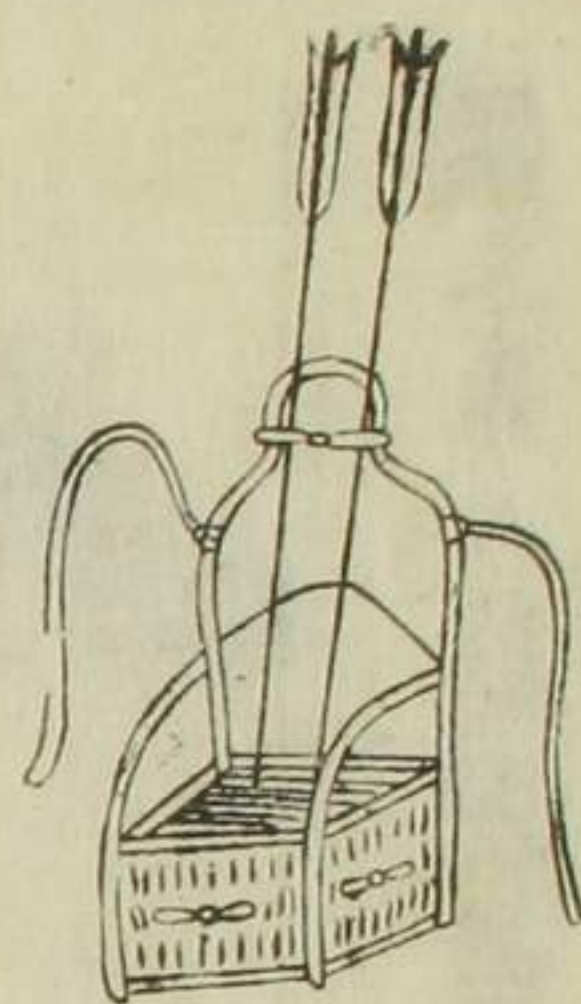
矢張り帷子と云ふは後三年の弦

鉢付ノ糸ヲ
 ワケテ布ヲ
 外ハ引出ス



ハナノ内ハ
 十文字ニ
 ナル也

一 後三年の弦を披るゝと云ふハ服の品なり

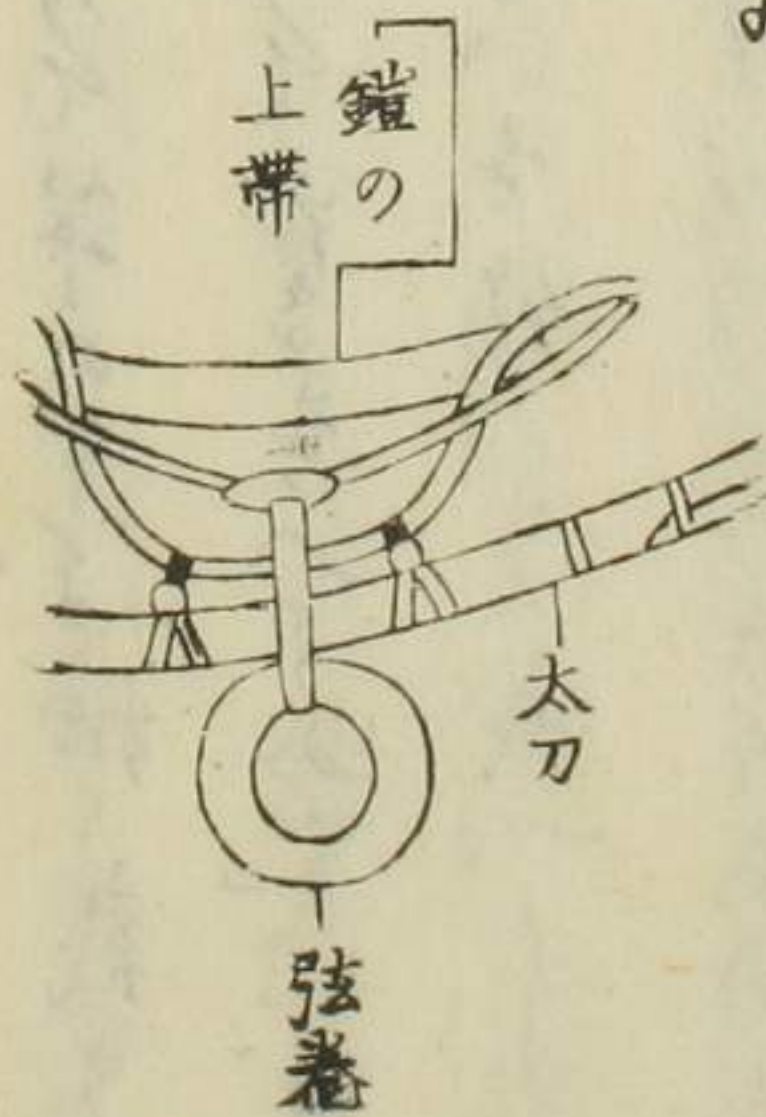


めはあつ辨く是きうろの籠ふ
へきおは服を真る辨うけ結を
肩よりけむうけ結うけ結とる

腰の廻を引廻して結る辨をききうろは結解のあや
まりぬへー結解ある故服の原解あはうとさき
よりへーうやうあるは古画ありとて一概は信まづとい

一 結袋のう後三年合戦の結

ええええは太刀れ帯とるうも
つらす服の結るもつけい別
は結袋は結を付えおひる



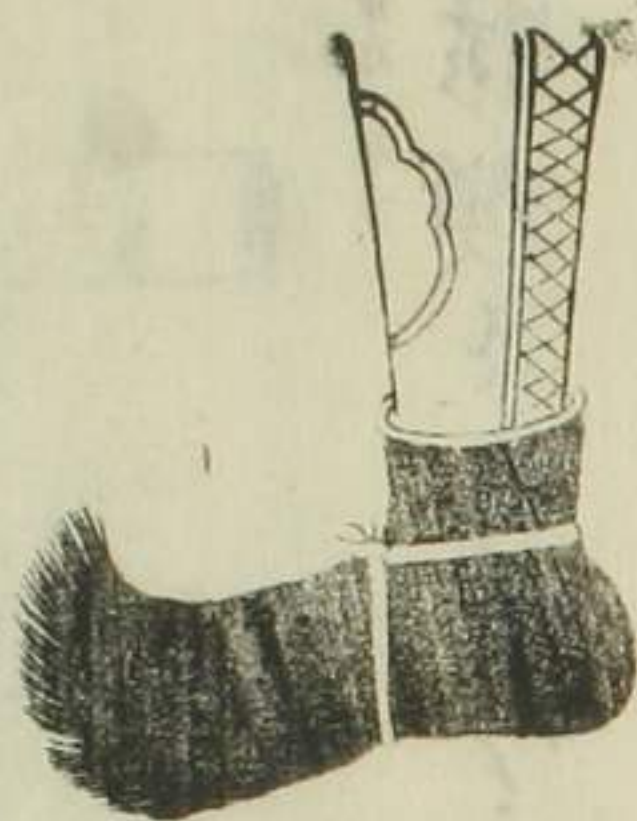
鑑の上
帯

太刀

弦巻

やうにえありて右の結のこと

一 後三年に結るええええ留の湯二ふたのめ



三井寺合戦ノ条

一 結は太平記 建武二年の戦は始て見えう後三年の

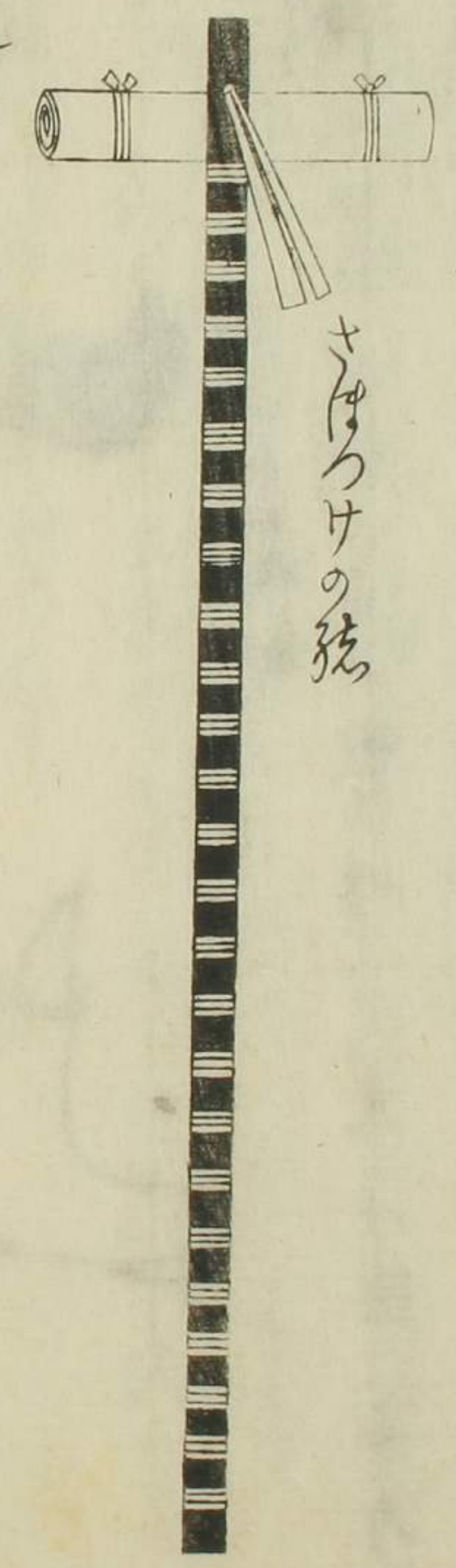
合戦の結



の中は結あるおきうろ結るうろあるあ 古はあ不こと
云ー結へー又長刀もえうろとの長刀は留るあるあ

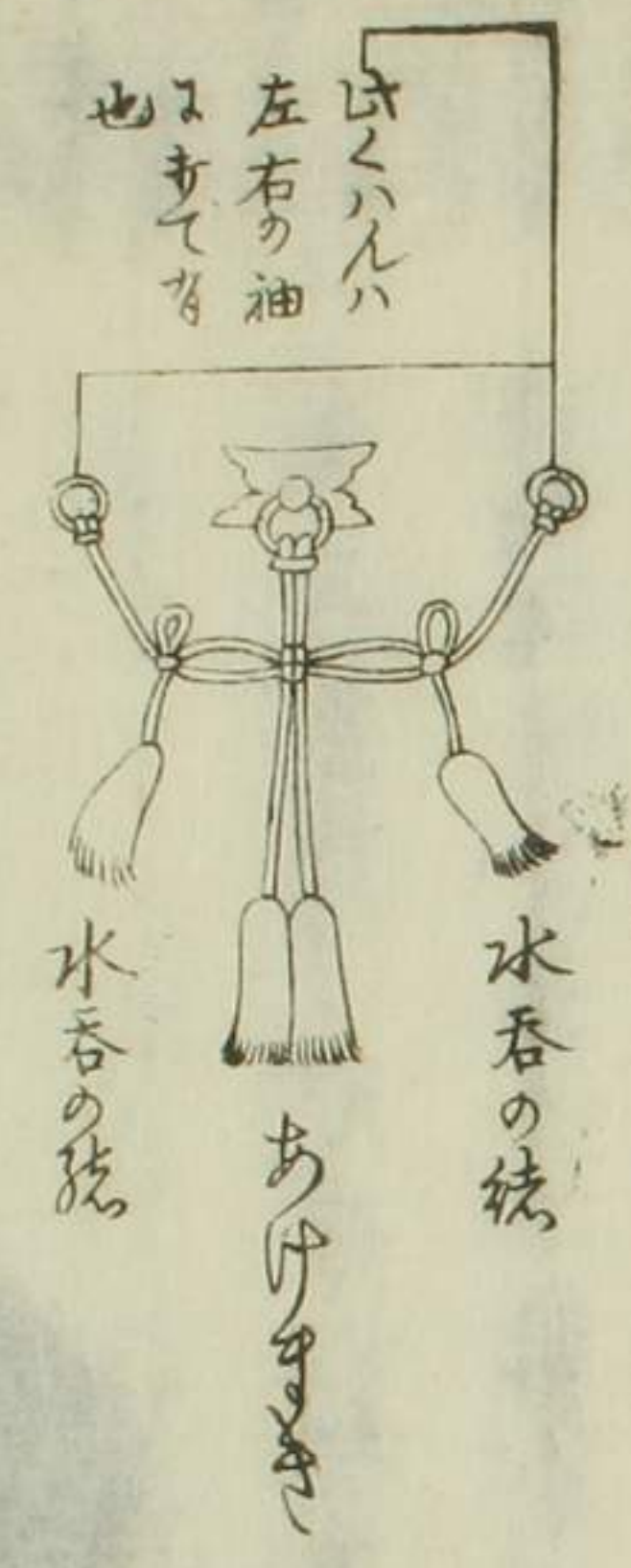
一 義家朝臣の旗後三年の旗は足るハ色白く無紋之ニ幅
 一 是れ其の方角にせしめし旗是の収馬とてしる
 持也又もその細のしる馬花のしる

平家朝臣卷士
 遠矢の条は主
 もあき白とて
 一 あつれすひさう
 て原氏の旗の
 一 旗のしる
 一 旗のしる



一 旗類をうけたる武志一人後三年の旗は足るハ旗類を古
 一 ハは旗類とも云面類のしる鼻もあつて旗のあ
 其のあきしるもの額の前ハから旗類と腮とけり

おろしものし旗類をハツフリとてハツフリハは旗類とも
 中首ともあつて旗類のしる
 旗の旗のしるの旗をきつけのあけしるハは旗類とも
 旗後三年の旗は足るハ旗類のしる



水香の旗をあげしるハは旗類とも
 水香の旗をあげしるハは旗類とも
 水香の旗をあげしるハは旗類とも

一 旗類の旗もその世はあつて旗類の旗もその世はあつて
 一 旗類の旗もその世はあつて旗類の旗もその世はあつて
 人行状の旗 土佐之 古画 旗類の旗もその世はあつて

舟みゑ舟一かき、辞書したるに辞書を前とむきひ
 ころもころもと結ひころも、あね、後三年の重とえり
 一重とち、卷とち、れハ結余り、後ろよ、とく、れを、あ、廻
 してあ、とむ、ハ結余り、軽くあ、と、是、二重とち、卷と
 謹のふ、を、と、と、ふ、つ、ろ、ハ、免、一、口、と、と、な、つ、け、ず、と
 小舟の結を脇のり、と、や、ふ、へ、
 左ふ、ハ、右の脇、と、や、ひ、
 右ふ、ハ、左の脇、と、や、ひ、

小笠原元長院
 兵日記も廟の
 有るあれとも園
 廟のふふり院
 兵日記ハ文明
 十八年の事
 聖徳太子の時
 代ハ云々唐の
 風を因りて其
 為に園廟を特
 有と云ふ所の
 云々一統云云軍
 陣云々唐中の園
 廟ハ有る云々准ス
 云々云々ハ秋
 云々云々云々

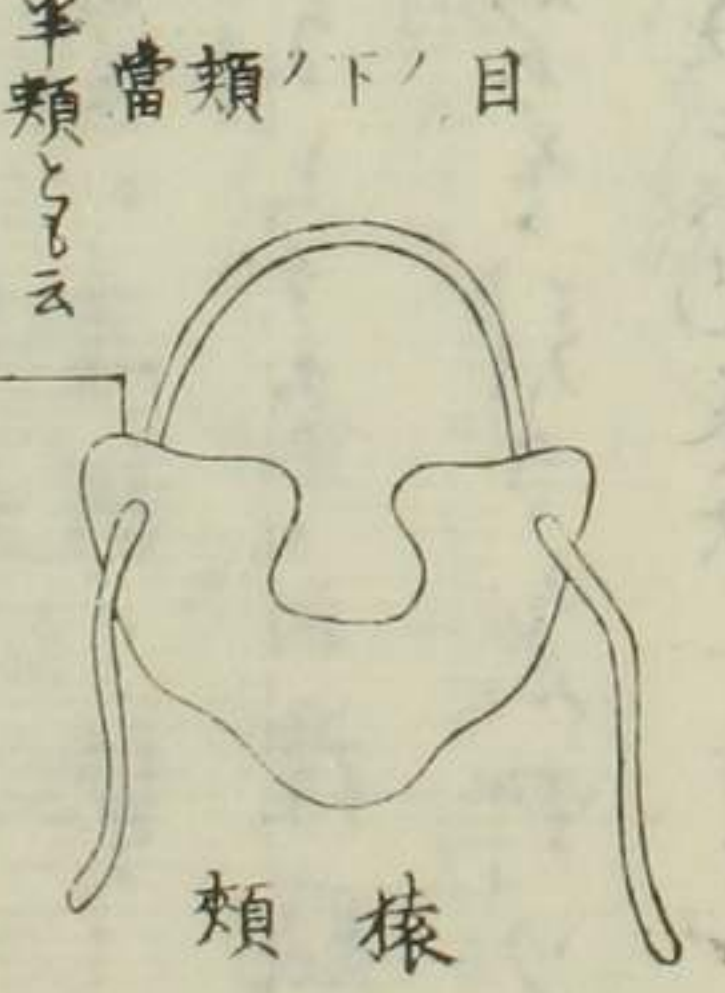
雜記上

名付て鉄の骨よりて地紙は漆ぬり油絵あるを
唯の地紙竹骨の面へ緒をけりて取あきぬる也

一 後三年の縁をえたる 指常のこころ 四角を細き
それより上の方又黒くさくえんだうの紋を一つ書きし

一 後三年の縁をえたる 幕四幅と五幅の幕一つえたる
何れも上の幅二幅は黒く下の方白又ハ上二幅白下二幅
黒より紋ハうりかきをきりて何れも上二幅は紋をきりて義家の降
はせ前ハハあき幔幕へ青白あきしものありて地
紙あり たるものよりて漆の面へ 又無紋者白幅変もあり

一 鉄面は品あり面類ハ形一面は満ちて目の下の類あり
目の下よりある猿類ハ鼻のあき



此半類ヲ當テ半首ヲ
カブレハ面類ト同シヤウ
ニナル也 此半類ノ鼻ヲ
取ハナシニナルヤウニシタル
モアリ 鼻ヲトレハ猿類
ニナル也

此猿類ヲ當テ半首
テカブレハ其類ノ猿類
ノ面ノ赤キ所ノゴトク
也半首ト類當ハ猿
ノ面テノ毛ノ所ノ如シ

一 鉄神の事を言ふ者といふハとて遠く鉄神ハ由月の下
りかづ神又身燈は由立時由を不用して鉄神なりとも

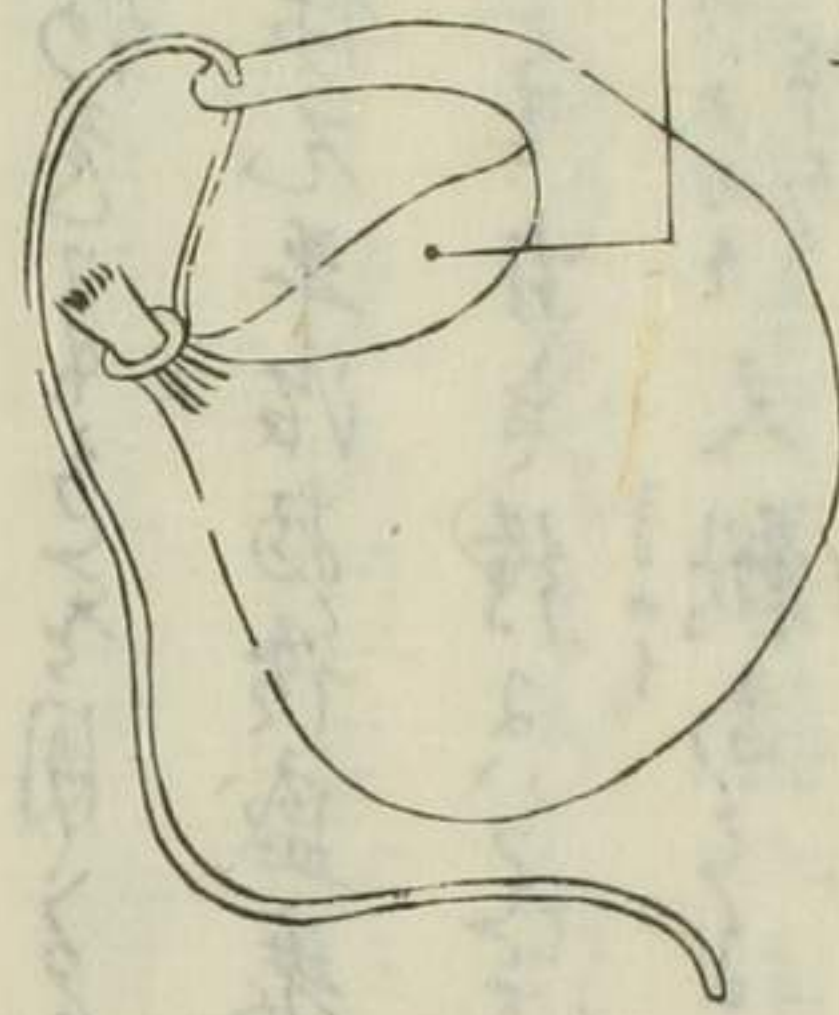
三十一

上古ハ鞠ヲカラ
 氏云後威高鞠
 フイヅノタカニ
 トヨム日本記ニ
 アリ又ホシダ
 ヨム日本記ニア
 今ノ神室ハ地
 フ黒クスリテ
 バヲ白ク銀フ
 ニテカク也

ハカ丸の腕^{トモ}は
 てく付^{トモ}中ハ空
 是杯^{トモ}あ^{トモ}の
 コ^{トモ}

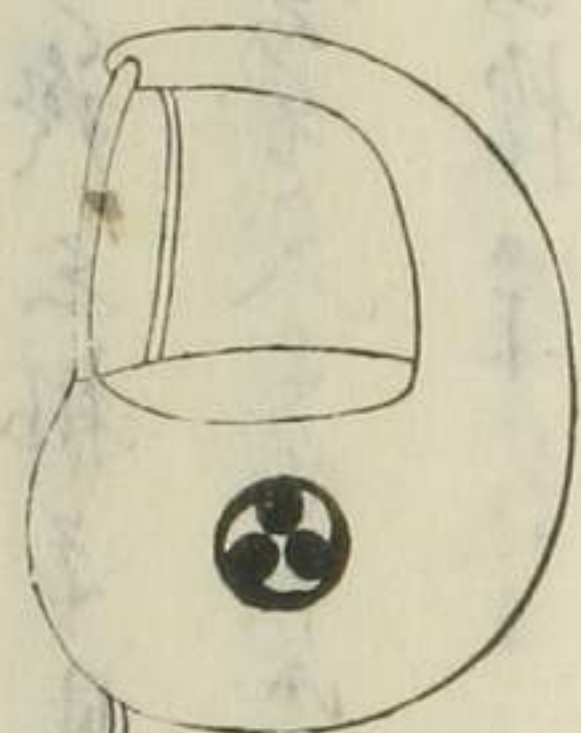
弓の弦^{トモ}を腕^{トモ}を^{トモ}防^{トモ}く^{トモ}為^{トモ}の^{トモ}袖^{トモ}ハ^{トモ}二^{トモ}あり
 武用の^{トモ}鞠^{トモ}ハ^{トモ}俣^{トモ}勢^{トモ}神^{トモ}寶^{トモ}の^{トモ}鞠^{トモ}ハ^{トモ}二^{トモ}あり^{トモ}武^{トモ}用^{トモ}の^{トモ}鞠^{トモ}ハ^{トモ}
 熊^{トモ}の^{トモ}皮^{トモ}を^{トモ}作^{トモ}り^{トモ}毛^{トモ}ハ^{トモ}裏^{トモ}の^{トモ}方^{トモ}腕^{トモ}を^{トモ}通^{トモ}ス^{トモ}所^{トモ}ハ^{トモ}牛^{トモ}の^{トモ}革^{トモ}を^{トモ}以^{トモ}て^{トモ}
 糸^{トモ}を^{トモ}付^{トモ}て^{トモ}紫^{トモ}の^{トモ}組^{トモ}結^{トモ}を^{トモ}付^{トモ}て^{トモ}又^{トモ}神^{トモ}室^{トモ}の^{トモ}鞠^{トモ}ハ^{トモ}麻^{トモ}の^{トモ}皮^{トモ}
 糸^{トモ}を^{トモ}付^{トモ}て^{トモ}胡^{トモ}粉^{トモ}を^{トモ}ぬ^{トモ}り^{トモ}て^{トモ}糸^{トモ}を^{トモ}以^{トモ}て^{トモ}縫^{トモ}を^{トモ}お^{トモ}ふ^{トモ}
 ハ延喜式と云ふ^{トモ}ま^{トモ}に^{トモ}云^{トモ}ふ^{トモ}

武用の
鞠之圖



光大曰延喜式^{兵庫}曰鞠一^{兵庫}枚
 功一熊草一條^鞠料長九^{兵庫}寸廣五寸牛
 草一條^鞠手ノ料長九^{兵庫}寸廣二寸^{兵庫}鞠袋
 料紫表緋裏帛各一條^{兵庫}各

大神宮
神寶之
鞠之圖



一丈二尺三寸廣八寸^{兵庫}縫紫絲二^{兵庫}錄^{兵庫}細
 一條^長四丈^{兵庫}又^{兵庫}人^{兵庫}神^{兵庫}宮^{兵庫}式^{兵庫}鞠^{兵庫}二十
 四枚^{兵庫}以^{兵庫}鹿^{兵庫}皮^{兵庫}縫^{兵庫}之^{兵庫}胡^{兵庫}粉^{兵庫}塗^{兵庫}以^{兵庫}墨^{兵庫}
 畫^{兵庫}之^{兵庫}納^{兵庫}持^{兵庫}麻^{兵庫}笥^{兵庫}二^{兵庫}合^{兵庫}徑^{兵庫}一

尺六寸深一尺四寸五分^{兵庫}著緒一^{兵庫}處^{兵庫}用^{兵庫}紫^{兵庫}草^{兵庫}云々^{兵庫}貞丈曰兵庫寮式
 之鞠是天子御物不塗不畫也大神宮式之鞠是神寶
 塗^{兵庫}以^{兵庫}胡^{兵庫}粉^{兵庫}畫^{兵庫}以^{兵庫}墨^{兵庫}也後代鞠張不存無作^{兵庫}鞠^{兵庫}者^{兵庫}故^{兵庫}今^{兵庫}神
 寶^{兵庫}櫓^{兵庫}木^{兵庫}以^{兵庫}模^{兵庫}作^{兵庫}其^{兵庫}形^{兵庫}塗^{兵庫}以^{兵庫}墨^{兵庫}畫^{兵庫}丈^{兵庫}以^{兵庫}銀^{兵庫}粉^{兵庫}其^{兵庫}形^{兵庫}圖^{兵庫}三^{兵庫}鞠^{兵庫}繪^{兵庫}
 在于兩傍彩色黑白與式相反也^{兵庫}以上貞丈^{兵庫}翁^{兵庫}の^{兵庫}
 鞠考^{兵庫}を^{兵庫}以^{兵庫}補^{兵庫}入^{兵庫}

貞治五年十二月廿日二条攝政殿^{良基}より^{兵庫}所^{兵庫}より^{兵庫}年
 中行事^{兵庫}致^{兵庫}合^{兵庫}射^{兵庫}場^{兵庫}始^{兵庫}致^{兵庫}の^{兵庫}事^{兵庫}を^{兵庫}よ^{兵庫}び^{兵庫}け^{兵庫}り^{兵庫}し^{兵庫}鞠^{兵庫}を^{兵庫}け^{兵庫}り^{兵庫}

弓射をうけ以て知る人も多くあきまゝありて治の
以てや鞠をうける終て知る人かくありし

一陣羽織と云物ハ天文あとの以始り物に東山殿の時代の

書ありまハ又元江室町殿日記に云
江室町日記ハ徳名の
年中の日記に其字の
室町日記とハ別あり

得能便を中より手許を有はは世をい

むとあくハ仍先日此紙に馬具大綱鞍系眼
の終三掛并具是羽織十個中より何れもく
念を入させしは清和可きは物也便付ハ
只世澤と

六月十三日

猶林市唐の長高

右より好修理左更義長あつて物を調へ送りし状に
具是羽織ハ陣羽織のより義長ハ天文永祿の比の人
は江陣羽織ハ世に用ひしものと見へる

一 手許と云物江平盛義記義経記ホは所よりみえり
是ハその書物の新より下後三年義経の終は書物の
みえり物みえりし物也あはれす手許あつて

一 近世禮を作りし體所紙拾を以て其主の胸の乳
の辺のす片を以て其人の胸に志をせて禮の胸を作
るゆへ之を以てみえりし物と云はれし是禮の胸

古ノ鑑ハ右ノ方
合ス其アキマラ
フサク為ニ脇楯
ヲ當ル也右ノ方ハ
アキテアル故大男
ニモ小男ニモ身三
合サレフナシサレ
ハ古ノ鑑ト云フ
ナシ又古ノ簡ハ
ハ右ニテ引合スル
更ハ今ノ具足
ノ如シ然レ胸ノ
中ニタツロキ有
テタタヒレ今
世乳鑑ニテ作り
タル鑑ハ背モ胸
モクワロキナクマ
ル故大ニハタラキ
息キリタル時ハ
甚クルニキ也今
世新ニ鑑ヲ作
ラハクワロキヲ專
ニシテアツラヘ
ベキ也

くろろきあゝしてはよりぬく古作の鑑ハ胸よりくろろきあ
ぬく久あゝるそなへて辨くひとぬく多し今作より鑑
と古作の鑑とを著くづで知るべし又重代の鑑ハ先祖
の鑑を子孫に傳へて是よりより古よりより其の
人々の乳鑑をぬひて別す法をそ作るあり胸の
内よりくろろきあぬく後胸も合ふと辨く鑑を作
る事あり古作の鑑を多事よりしてそす法をそ作
らせたよりより義經記は毎まう鑑の所よりより
かきつけたりと知るべし今又左平記は匹檀妙玄鑑
の引合より知るべし此現取知るべし今よりより胸の

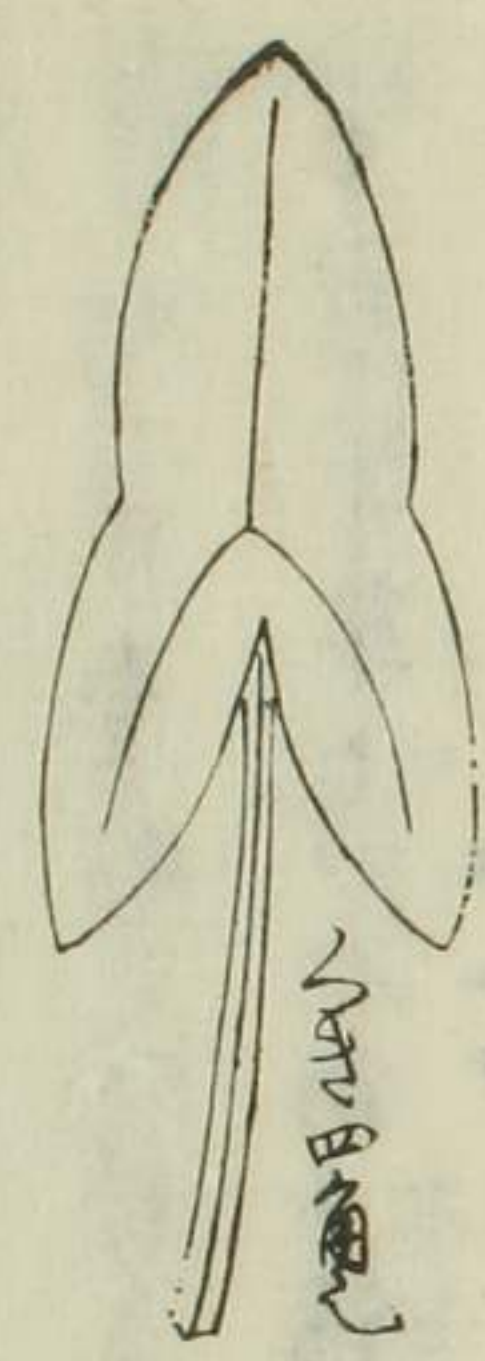
内よりよりあるを知らるべし

古き物語は我々も腹をわらう事より腹ひあゝ又八苦
事より腹あゝ云ハ腹を足と事より上げて腹ひよりハ
あゝ大兵強力と事と矢人を長く引く故腹を腹た
神矢人長く事とわのふかゝらう事と事とわのふかゝ
腹ハ事より上げて腹へも矢ぬき出さる事と物あり
毎まう七の道具といふ事を世にいひ傳へ給ふ物なり
大槌大楯鐵片ボウ持たふ事とわが事と事とをたふ物と背
負ひし物と辨を給ふ事と義經記をより事と矢ぬきし
道具といふ名目ハ事と義經記の内位者大槌ニテ不

一

戦の象は云むさう房ハワビと云矢をハハくするなり四
 尺二寸ありきつるやうそのた力をいして器と云ふと云
 刀をさしぬのやうなるまじりあひる蘆薈^セの葉をい
 づからひひきと入れて身をもちあふけ持たる物ハハる
 の木の梓の一丈二尺有るふらうまじりあひる上はひき
 いるは石づきうたるを服ふと云ふ小舟のまじりあひ
 雲と云ふ是等のるをさう道長と云ふはひき
 たる物あつた宵は便いふあつたあはるなり人毛
 いろし又つらもあつた是ホのあつたをいひるなり何ん
 一 胃^{カク}の^{クシ}形^{カタ}と云物ハ^{クハイ}菰^{カタ}形^{カタ}と云ふなりと云を^{カク}

くらげと云ふ又を何と云ふは^{カク}の字を^{カク}り用と云ふ
 うを^{カク}り用と云ふと云を^{カク}り用と云ふ
 あつたなり又用と云ふ
 ○くらげの葉の面の象
 軍勢を加へる勢を^{カク}威勢を加へる勢を^{カク}
 顔目やうなるなりか^{カク}の^{カク}なり



○昆布を^{カク}と云ふと云ふは^{カク}の^{カク}
 勝を^{カク}と云ふは^{カク}の^{カク}
 十^{カク}堅栗^{カク}ヲ勝^{カク}ト云ふは^{カク}の^{カク}
 強ニ^{カク}と云ふは^{カク}の^{カク}



あつたはくらげハハおむるの葉の形しあつたハ勝軍草

ときて澤草もおもむく威あり曹もくも飛ありと云
 け悦あやうく之名の悦のこくおもむく地草の
 形を悦とくもくくく名つけるや其名或叶くもく
 又おもむく勝軍草と云くくくく勝軍草も
 たうかぐくおもむく代の人勝軍草と称名付く
 一勝軍草とくく威あり威毛も淋形も有り
 あくくくく白膠木ナルテを勝軍木と云く威あり軍器
 用くハあり軍器も同く威あり軍木と云く
 おもむくハ燕尾草と云水草と
 澤草ノ二字ヲ古ヨリおもむく
 用くハありく列の
 のおもむくの茶正面の○おもむくの茶脇の方よりくく



ヲモタカノ莖ハ三角
ナリクワ井ノ莖ハ四
角

おもだうに養はるをうちきうくはぬの養ひにくなきう
 謹のおもさう威はばおもさうに形をすあひさう

一勝軍本八

スルデ
白膠
ハゼウルシ

也

勝軍本と云史一名かつの本とも云け本三五倍子
あり故や一集とも云五倍子ハかゝるつゝ又て蘭

を解か
のちあり

聖懷太子守屋を誅伐し、
寄白膝成りて四天王

の像を作り頂の上を占め戦ひし大軍は勝つて

日本記は是をうけ
付故を以て軍器は白膠木を用ひ

軍營は月夜にありて勝軍本と名付しあり
水虎屏
古今著述

水鏡每
古今著

桑元亨款書

馬上省ノ一名物
射省トモ云

又一名鼻高ト
云ト云説アリ派
之鼻高ハ別也

團別ニアリ可也
小笠原長秀祀

云省仕立マウノ
事然ハ皮上品也

モノ方ヲ外ナ
シテ格ニ内ハ鞠

ノ省ニ同シ云
是モ皮ノ馬ニ

省也云ノ前ノ箇
第ノ騎馬出マ

キナリ次ニ省
イヘリ軍

ツラマニ
記云セニ

以遠御幸
非藉糸

ニキ馬

馬ノ名所小笠
原持長ノ記ニ見
ナリ

馬ノ名所小笠
原持長ノ記ニ見
ナリ

一馬上省クラのりやも終はは省をきくる神足元より犬追

拍笠懸流福馬木の町もたも馬もあつたあれを必

は省をもきく射所秘傳書云云武田家の書 省ハあめ草は

て作りハミ先はひびを十二とて十二ハ非也馬漆はぬる

たてあげハ地力キ色白キ紋アリ紋定リナシナラシモ也草はて

へく矢板ハ服ホく馬は云省ハ草は根をぬり

たるたてあげハ省の外のおもて振るたてあげの内向

せいよう又ハたこのむくろもする云右貞衡の犬

追物照鏡云省も新あハまづて悪くかゝるあじ

たるハよき古ハ省のうもぬる射所をみるいあげ

射所秘傳書云又云省をもく射したよりきくぬる

たよりぬる又射所方聞書云省のついでかゝる

あつても男入道も半いつれも若くかゝる云々高忠

聞書云多分左後云とも草の省あハそれの時ハく

す畧儀之内くしてハ犬笠懸の時も細あつてこの草

省の記したてあけと聞馬馬上省も聞たのめ

あめはてあつても云



此所漆革
タテアゲト
云
左省
外向
の図
タテアゲ
此所畳
表ヲ用
外向ハ漆
革也
左省
内向
の図
足ノ入所ヲ筒ト
云足ノウラニ縫
目無之
三角ニ折テ上ハ折返シトナ
付ル
四十

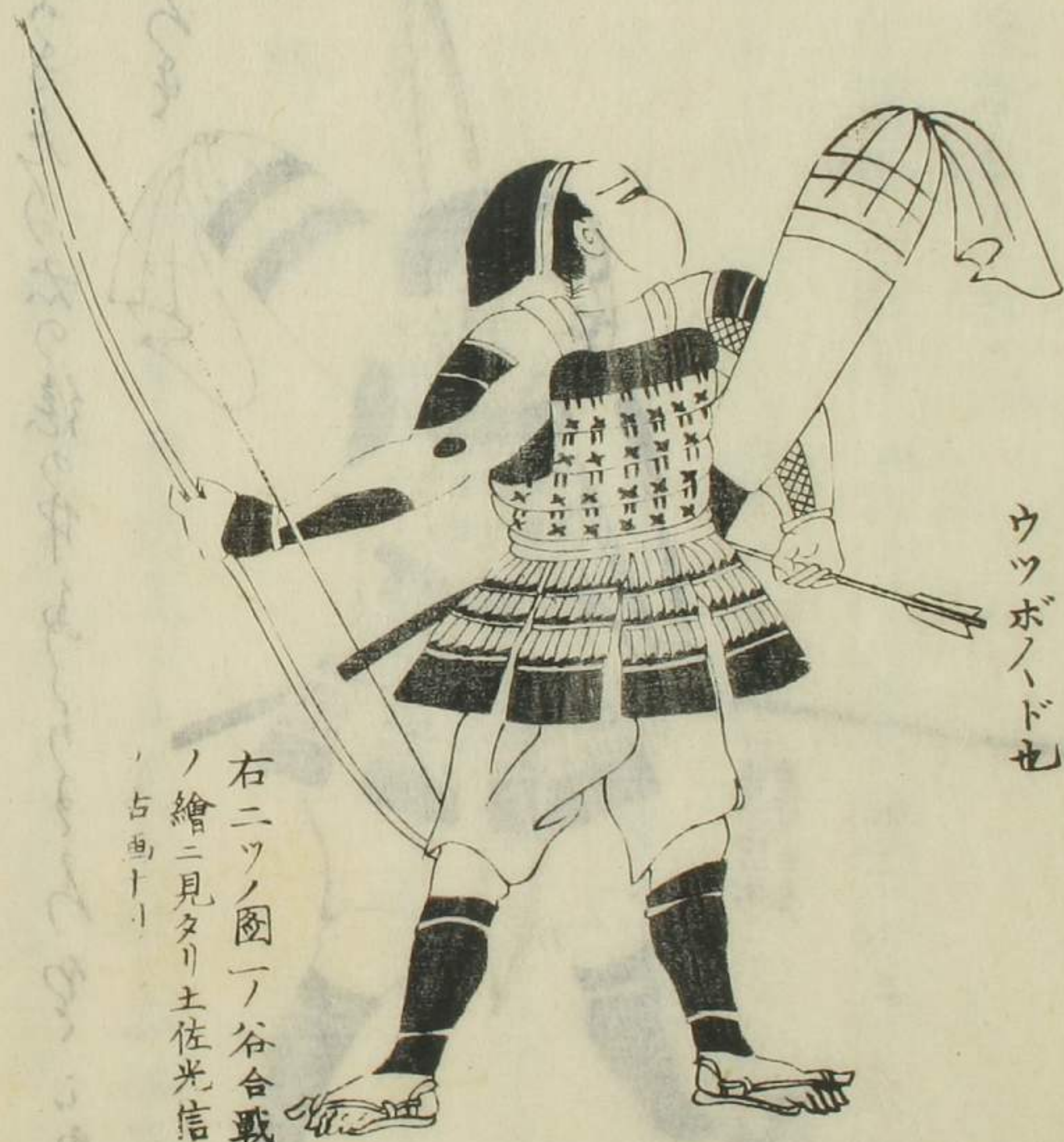
雜記十一

奉公人覚悟記云 きく清和殿の
奉を記する書 皆をめさせ下る皆の
結をたて阿げのうへよくひいて左皆よりめさせ下
は衆のちひ持つあよりめさせ下 バ 凡ゆる真衡云
左の足袋のごとく結を結ゆも阿結を足は差しての
むきひゆる結のききをもて重なる結をもてひいてけぬ
やうなせり云く真丈揃せてあけを際革までくハ
結を付る又くあけを箇とおあくあめ革まで
あゆるハ結を付るもて又云結はたて阿けをかく
あめて結はハあゆるけきやうもてハ結ハ結ゆも
向ふも手もてむきぬて革結と

一流 サンサメ 流馬の時に限らず鎌倉時代ハあづけをもて
手袋といひ束下東鑑者ナ多 オホ 好方好革降糸
の時頼朝よりきくもあひけのおを送る水貝珠の
中ハむき一結ハ海のうへくろてくろ又むき一
結 あづけ くらてやくりむき あづけ くらてぬくろ
あくるあり

一 コチ 町 ミチヨロイ 町 ミチヨロイ 町と云ハ出来合のふく證を云ハ町の字
をも用ハルハ待の字を用へて證師の方を證うか
を造り墨で買ふ人を待りあ出来合を待り買結
證と云ハ證のふくかづす ミチヨロイ 町

見一回をまかサ
 て羽の面は二ツ
 見すやうをうら
 かに付へて忍て矢
 わろをうらやま
 を振出かき前
 是候之を真文
 撫るは後日記参
 る清用おホの熱
 うつ不のよまを
 うけたらまてはあ
 しくは脈まひりし
 西行初流をあら
 室様ふまわをもあ
 けしえきり



ウツボノハド也

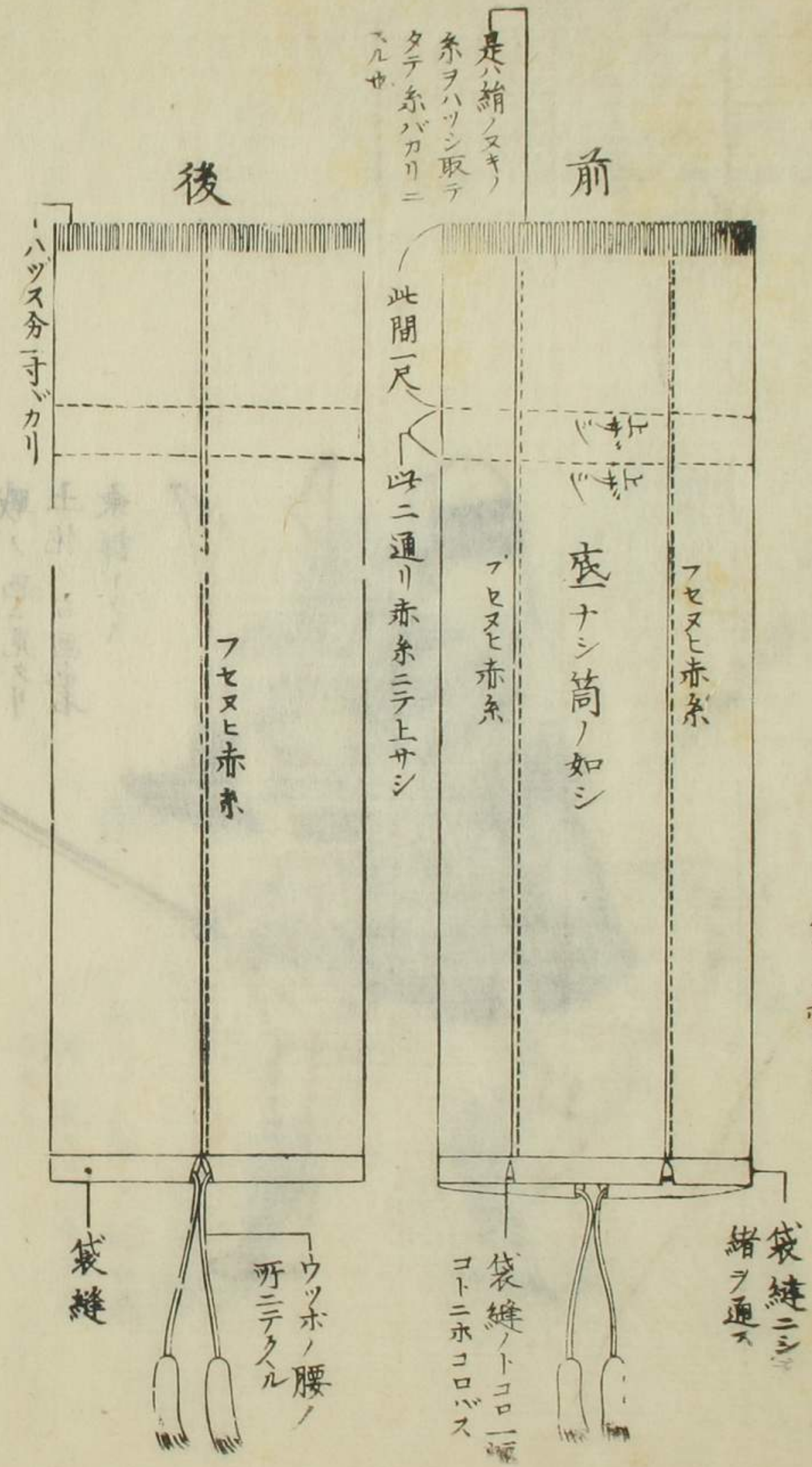
右ニツノ図一ノ谷合戦
 ノ繪ニ見タリ土佐光信
 ノ古画ナリ

此圖結城合
 戦ノ画ニ見タリ
 土佐ノ古画也名
 乗詳ナラス



ウツボ

家傳来の矢保侶之圖 長サ四尺三寸 箱三幅ヲ用



此保侶ヲウツホニカケテ上ノ方ヲ緒ニテクニ右ノ繪ノ如クナルナリ

昔の風は様うて振まうと言ふは昔の言なり云々云々の根柢ハ
 加へていふをうらなとて付くをいふよりあはれなり
 一之は腋志とあてあひうらなとていふよりいふよりあはれなり
 いふをやく人んするなをいふをさうたるを人ん知
 せむをいふをさうたるをいふをさうたるを人ん知
 故実として古代のうらなのことく作りおてあるの草紙
 うけあはれなりうらなとていふよりいふよりあはれなり
 らるるをいふをさうたるをいふをさうたるを人ん知
 ありをいふをさうたるをいふをさうたるを人ん知
 一のうらなとていふよりいふよりあはれなり

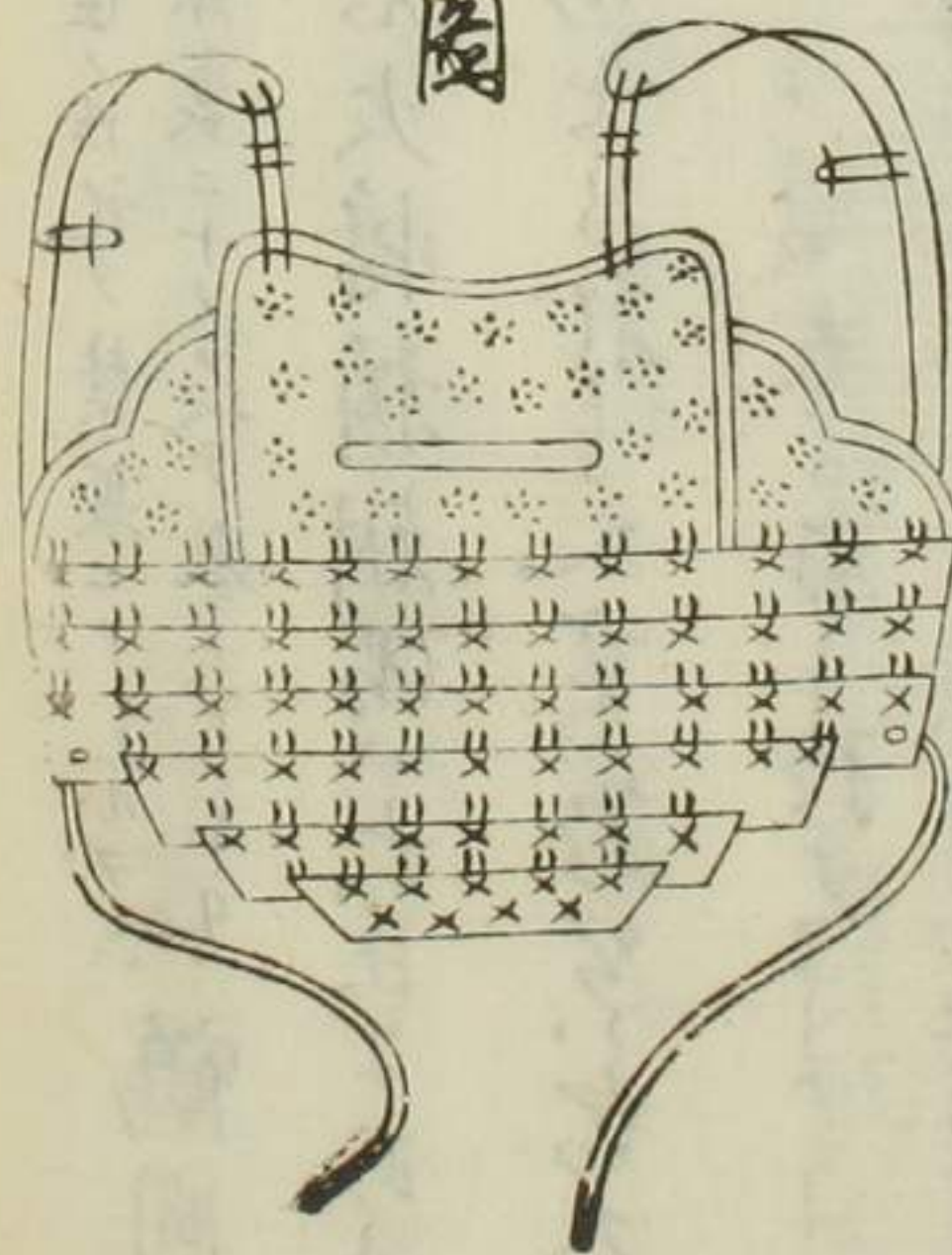
1
74

と云ふあやしのありて刃の形むう作りしは太刀之

関東の大勢
上洛ノ系

モロクソク

臍當之圖



旗ハ
綿

液酸砒

343

七

の
白

家能財
象乙

張

月の夜

善

心のまじり

四十六

大草紙云
旗ヲハ草官ノ
人ニサスヘカラス
太平記云上銃
軍合戦ノ条云
遠侍を以て
蝶本白くあり
吾竹の旗竿
ありされハ
船の上より
旗を賜ふ
と云えり
ありと云ひ
旗竿を以て
旗竿を贈るを
授けり
此旗竿の旗
ありを考へ
輝き白くあり
ハ白草と云ふ
なり

作り結を付て上帯の上より通しむきくそ腰高といふ
もの長サ七寸斗廣サ三寸斗は飯の形をして中より寸
は細き草子にてふきを二つしてそをふへ折刀脇指を通
してそをくは外色との作りねあり右腰高と云物ハ骨に
サそものへ古ハ太刀をさきうたうあてハ骨にさき
の刀ハ上帯にさうたうて室町殿の時代のころあてと云
物よりそハ引張のりなり
引張ハ皮のこころ作り
結を付て腰は高きあり 旅ハ
あともありあり

襦袢の装束ハ元大をさきくそ上は襦袢垂垂のりを
襦袢のり
あり
もきくそ足を入れ替えて袖垂垂をさきくそ袖の腰を取

よて腰を結く古ハ老のおもも襦袢の下に大口をさきく
又上ハ襦袢おももく下ハ襦袢もさきく大口をさきくもさきく
しへ太平記ハ卷六 関東の大勢
上段の事 我子ハ お侍
なま 一は次ハ カウ
額 額
襦袢垂垂は精好の大口を張くせばそをさきくこの襦袢は白星の
五枚巾は八龍を合してあて付るを襦袢 イ
骨 骨はさきく
又同書卷二 所
山ノ系 年十五斗あつ小児の 梅
山ノ系 山ノ系 梅
山ノ系 山ノ系
髪ハ唐帽よりさきく キ
ク 麴塵の筒ハ大口のこもさきく
取てさきく太何より上ハ襦袢垂垂より下ハ大口斗もさきく
襦袢ハ腰よりさきく

一 肩のりハさきくをさきく襦袢の下ハおももをさきく

利方ハ古集ノ
内ニ儲ニアリ
古人戰場ニ用ヒ
馴レタル古番
ヲタツニテ其
製作ヲ知全リ
サレハ古莫ユハ
利方アリ

して下りんことを爲て禮を乞ふるは成るハ儀也
 古の如きの風俗也古ハ軍中も礼儀を乱さず禮
 服を用ひて名付ハ武藝を乞ふんや信長秀吉の如
 きにして只ある簡易にしてまづ利便を宗とする也
 名付武藝あるハ各州の如くは捨て用ざりて
 近代世ハ軍容と云ふのもまづ利便を主とす利便
 と云ふは古より傳へたる軍容を乞ふの巧を加えて古風
 を改て新作をハ世ハ軍容の形を古と爲る遠ひて故義
 を失ふものあり上古より傳へる軍容ハ上古を軍
 陣ハ今ハ軍と利便あり也近代太平の世也

太平記卷十二 執
案全戦の条に
一首の条を置
市よりそ取
へりて送り
番元廿四
の五年はハ
を甲の神
より人の裡
に付せん
て云ふ
九、胃後
陰一アリ

せられし軍士の戦場を歩ても知らざるものなり
 聖のよき業推量をして巧み出たる判方道具ハもさう此
 場を診ていいうふべきやいやとあり
 笠志^{カサ}とていふ元軍胃は付々^{ハツ}強ある故笠志^{カサ}とてい
 たるは後ハ笠験と云ハきておの志^{カサ}といふは
 て神は付るをカサ志^{カサ}とて云ひく太平記卷ハ
 笠市なくてハ同士付るをぬといふ面鏡を一尺切て風と
 つかふ字を書て鏡の神を付させぬとあり又藤元記
 も衣裏ハ富貴の笠市とあり何れも皆さうなり
 のなりといふなり

一 鎧の胸ドウは草摺クサズリをけりたる糸をゆるぎの糸をきりて

きの糸の糸を糸を不用して一枚草摺を胸へ取付

けりたるを蝙蝠カウモリ付といふは蝙蝠ツバサの翅ツバサは羽毛ツバサあつてはきり

ある板糸の毛引あつて草摺をつづひをきりたるをけり

はけりといふ

一 獅子頭シニ、カミラの胃カストといふは胃のまじきを獅子の面シニは二つ

うへうをきり獅子の面を横平くゆびさへ一面を作り

いへは義家親王の像大塔宮の像の古画をえり

龍頭リウカシラの胃カストといふは胃のまじきを龍の頭リウカシラを作りたるは古画

ともはえり飛彈ヒダンは昔よりありて後三年合戦の龍は

家朝臣の胃カストはハ胃の天遠テンエンの上は龍をきりたる形を画

りたるは龍の頭リウカシラはハ胃の天遠テンエンの上は龍をきりたる形を画

ともに作りて龍の全体リウカシラをきりたる形は龍の胃カストはハ

龍の胃カストはハ胃の天遠テンエンの上は龍をきりたる形を画

もあつてハ胃の天遠テンエンの上は龍をきりたる形を画

一 甲カサの字カサはハ胃の天遠テンエンの上は龍をきりたる形を画

源平盛衰記ゲンヘイセイサイキあるハ甲の字カサはハ胃の天遠テンエンの上は龍をきりたる形を画

今世修治イマセシュヂの如くハ甲の字カサはハ胃の天遠テンエンの上は龍をきりたる形を画

よりハ胃の天遠テンエンの上は龍をきりたる形を画

よきハ胃の天遠テンエンの上は龍をきりたる形を画

そしきある

一 是にて武具ハハるもの力もよりもふく種く種きを因り
古人の教之太く長く重きハ甚害あり 建久二年^{辛酉}八
月一日頼朝卿の御前にて酒宴の時物語の次は太倉平
太景能玄ル保元の合戦の事を語りて云勇士の用意
は(き物ハ武具也)就中縮め用(き物ハ弓矢の用意也)然るとも弓矢
の用法を要するは^{ガイブ}涯分は過るるれ^{涯分は過るるれ}
是故ハ大炊の門河原は於て景能ハ男の^{ハ男トハ}
は^{西ハ郎ヲ云}男弓をひくんと欲す景能潛み^{ハ男トハ}以て是を害せり

景能ハ^{西ハ郎ヲ云}西より出あふ^{ハ男トハ}騎馬の討り^{ハ男トハ}聊心は任せざるれ
然る西の^{ハ男トハ}景能ハ東國は於て馬は^{ハ男トハ}引るんとあられハ男の
書^{ハ男トハ}は馳廻り^{ハ男トハ}時^{ハ男トハ}緯お^{ハ男トハ}遠^{ハ男トハ}なり^{ハ男トハ}
越^{ハ男トハ}は及て^{ハ男トハ}
き矢が膝はやりと^{ハ男トハ}げ^{ハ男トハ}衣^{ハ男トハ}衣^{ハ男トハ}及^{ハ男トハ}也^{ハ男トハ}の^{ハ男トハ}忽^{ハ男トハ}は^{ハ男トハ}命^{ハ男トハ}を^{ハ男トハ}失^{ハ男トハ}へ^{ハ男トハ}り^{ハ男トハ}
勇士ハ只^{ハ男トハ}騎馬は^{ハ男トハ}遠^{ハ男トハ}なり^{ハ男トハ}
三年十月十五日^日實朝^{ハ男トハ}ハ^{ハ男トハ}叡^{ハ男トハ}山^{ハ男トハ}の^{ハ男トハ}衆^{ハ男トハ}徒^{ハ男トハ}の^{ハ男トハ}籠^{ハ男トハ}り^{ハ男トハ}る^{ハ男トハ}金^{ハ男トハ}子^{ハ男トハ}山^{ハ男トハ}の^{ハ男トハ}
城^{ハ男トハ}を^{ハ男トハ}攻^{ハ男トハ}め^{ハ男トハ}り^{ハ男トハ}可^{ハ男トハ}官^{ハ男トハ}軍^{ハ男トハ}三^{ハ男トハ}百^{ハ男トハ}人^{ハ男トハ}惡^{ハ男トハ}徒^{ハ男トハ}の^{ハ男トハ}爲^{ハ男トハ}に^{ハ男トハ}討^{ハ男トハ}た^{ハ男トハ}る^{ハ男トハ}事^{ハ男トハ}を^{ハ男トハ}中^{ハ男トハ}
は^{ハ男トハ}依^{ハ男トハ}り^{ハ男トハ}本^{ハ男トハ}太^{ハ男トハ}郎^{ハ男トハ}重^{ハ男トハ}綱^{ハ男トハ}も^{ハ男トハ}討^{ハ男トハ}死^{ハ男トハ}せ^{ハ男トハ}り^{ハ男トハ}重^{ハ男トハ}綱^{ハ男トハ}ハ^{ハ男トハ}依^{ハ男トハ}り^{ハ男トハ}本^{ハ男トハ}太^{ハ男トハ}郎^{ハ男トハ}

一 鎧の逆板サカイタの事 古ノ本式ノ鎧ニ逆板アリ 今ノ具是ニハ逆板ナシ 鎧の背の上の方

横は廣サキナシ斗の透間あり 是の背をわける所の
 くりくりのゑあるはあひのきよはびをうらひのきよを透
 間の所を逆板の隙のあより下の鎧の札をひきて草摺のゆき
 の糸のめくり毛引するこしそあひがた背をあらう
 透間をうら背をめむれば透間出するそ透間の糸の
 所をうらるゑより逆板をあへおろし逆板あへ
 せきをはるゑより逆板のからくも手しらぬるゑより
 是のゑのこしめあへきよの縁はくしめくしめ
 へあへきよをけりしはけりし心はるゑより

此所札ナシ糸斗也サカ板ヲ下へ
 下ハ糸タル也其上ハ
 逆板カフサル也



是ハサカ板ノウラ方也
 サカ板ヲ上ハ子ナケタル
 弊也此サカ板ノ表ニ
 コキ付ノクシアリ

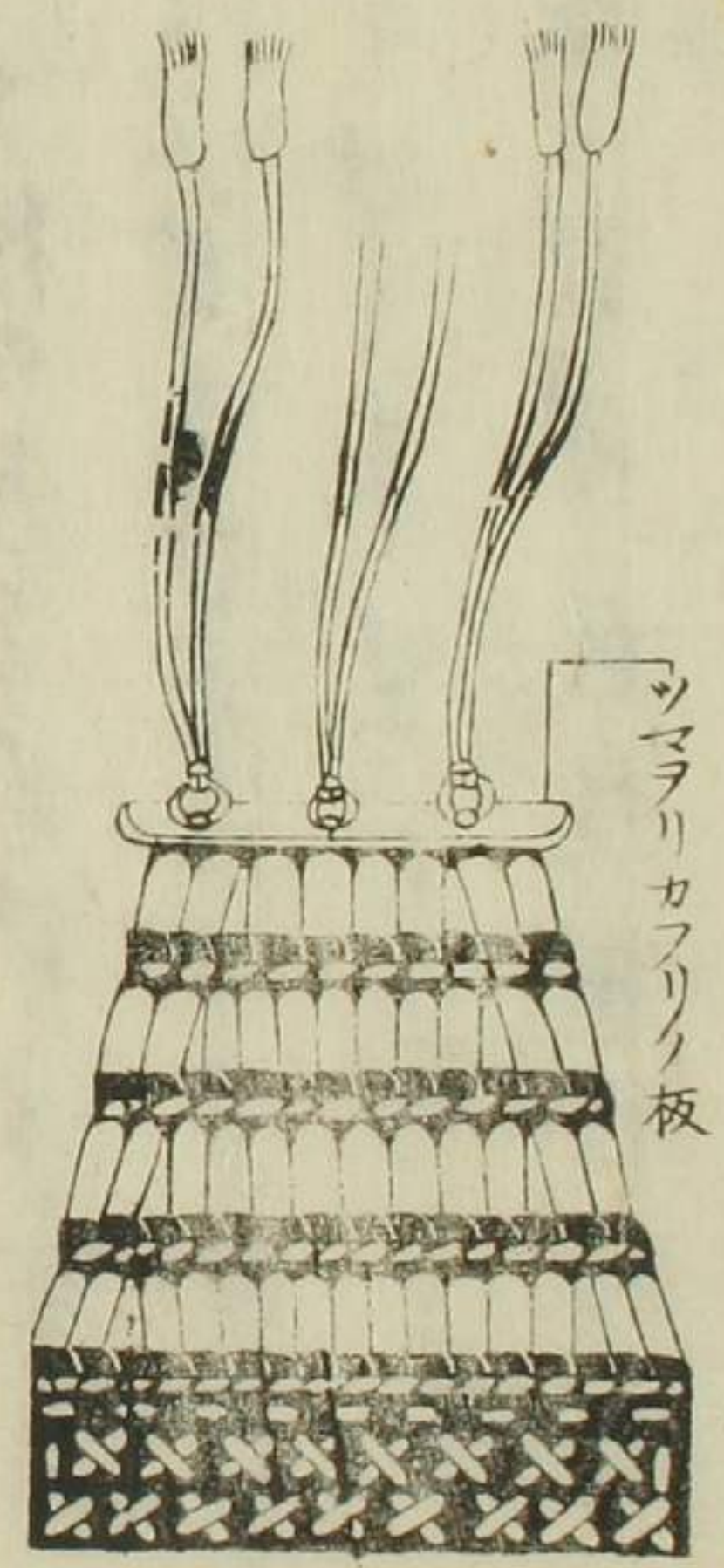
オトシケ

一 體の威毛といふ所の如く詳あつても後世流る語は太角
 記保胤といひ博士人の文のよりあるを詳判しけり
 ありてその中又匡衡の文を詳しと云（百三箇）云
 匡衡標のやういふ所の如く阿けのうもてひを武士とて
 といひあつてもきそえあぬ著この浦のあつてものりて
 相段関越あつてものせきをもつてあけしきありとそやけとそ
 保胤ハ一條院の法代の人をもて考ふるハ一條院の法代
 既ハ継威あつてもあるあり然れハ威毛の名ともハ然
 又よりも先の法代より阿けしきありとそやけとそ
 然ハ詳あつても
 又右ノ文ニテ 継威ハ草威
 ナルコトヲミナスル

一 後三年合戦後の中又體の神草標上の派ハ白くてそ
 次ハす紫又そ次中紫を次ハ紫をきどりうハ紫
 族といふ物ハ威毛ハ紫族といふ物ハ古物傳あるハ元
 ねともそ族のきとり紫族ハ束帯の時太刀をもつて
 平族といふ紫をもつてそそ平族ハ紫族あり地を
 白くして諸をうす紫より次ハ束帯ハ束帯ハ白くして
 うす紫ハ限らず棟族樞族等何り皆地ハ白きこ
 右の族のきどりも紫族ハ束帯ハ束帯ハ白くして
 ハ初よりうす紫より次ハ束帯ハ束帯ハ白くして
 して次ハ束帯ハ束帯ハ白くして白地あるハ族也

一 今川家の笠験あつてなる
カサシム
 光太曰あつてゐるのうへを三
 小神祇の類に記してある略ス
 一つが袖上のすつねと細きあつた袖と云々神とす
 壺のうへに張りあつた本は窄袖也
 表の折作ル

之図
 窄袖
カサシム



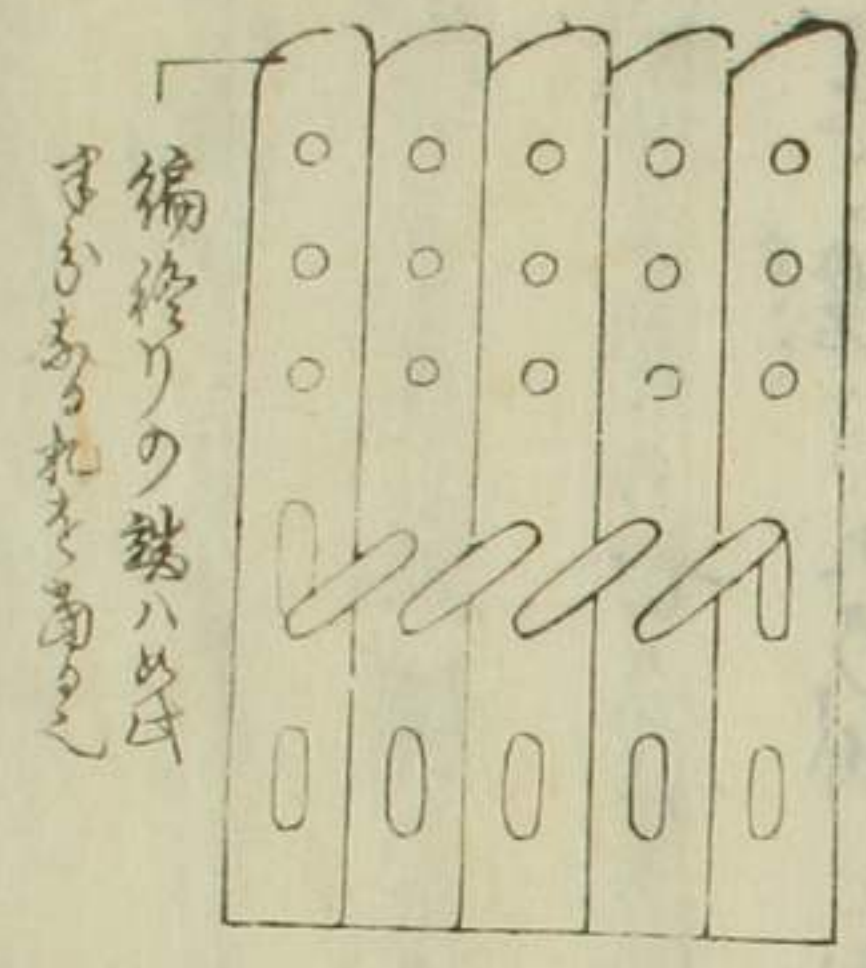
上つたを
 下廣

一 禮の札ハ割一札ホ之割小札ハつた草をこれをして作り
 て編み連ぬる或ハ草をいじりぬをこれをして作りて草の札と
 一枚をせよすり毛を子染と云ふ草をいじりぬをこれをして作りて草の札と

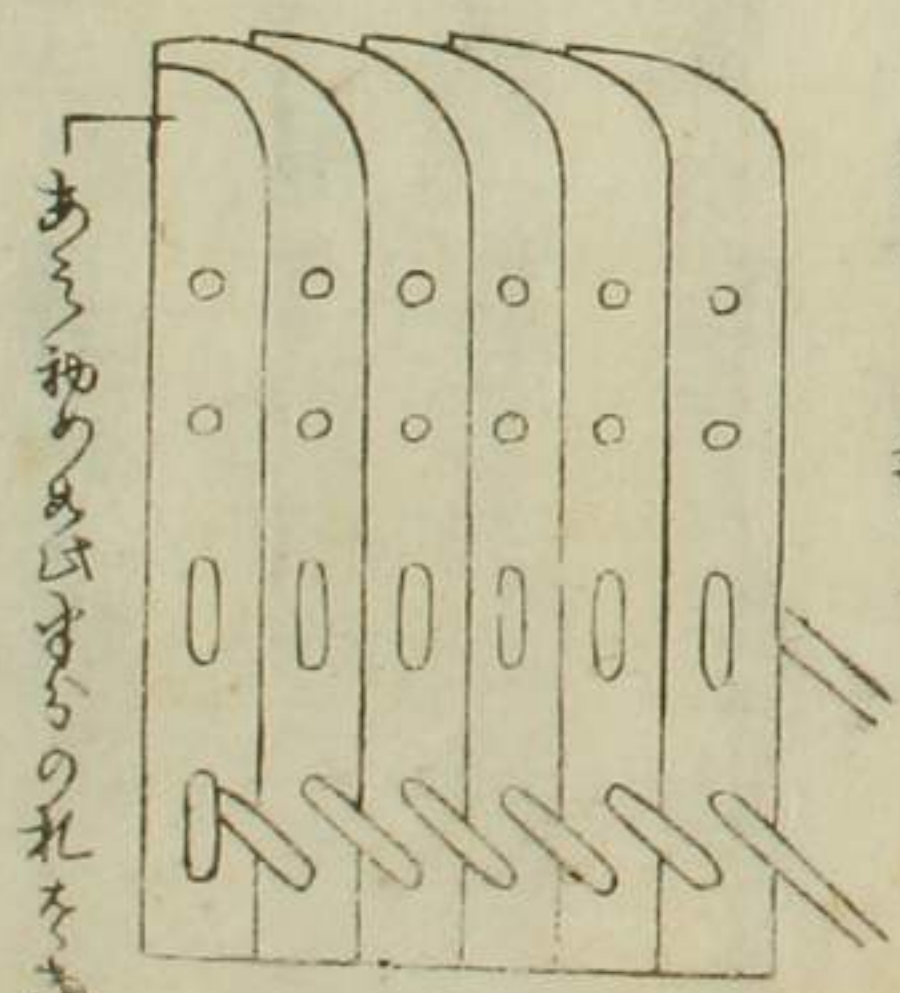
といひ又一枚をせの禮と云はばるゝ古代の禮皆割小札と

大ナル五ツノ穴ハ威モ穴也
 小ナルハツノ穴小札ヲアム穴也
 惣計ニテ穴數十三也
 札一ツノ形
 かのと
 貞丈翁ハ細キ鉄ヲ緯ニ入テ小札ヲ
 編ムト云レタレ氏鉄ノヌキヲ入タルハ
 札ニアガキナクテアシ古代ノ小札
 何レモ緯ヲ入タルハ無之此圖ハ光大
 補正シテ記ス也

表



裏



一 續小札ハ割小札をせず一枚をして照らふ條ハ胸を付て
 別小札をさすやあつては新に足せてこゝろに

實ハ一枚之小札を一枚にわねぬ有様小札と云明後あり
近代の證皆是也

一 乳縄ナハの事 近世證を新あ作るは證所紙接する人
の乳通りのすたをかく主人の胸はあつたうと云ふ
作は是を乳縄と云ふ證所の志出するも何んか
近世太平の世は生れ出で戦場の儼を志する軍兵
の事タビ席の上の料簡とて昔の證の胸のめりくくろ
きあを志して是を志する計するを却る志しと
志し誤りて志する身よりねあつた始りう證所の
指武道を知ぬ志ある何ううと志を志する

思ひて乳縄を志するのねは大切の事なり古代乳縄と
いふ事志するは乳縄の事既に志する記を志す
一 近世の具是の胸は最上胸と云ふ何れは四枚胸は
近世の志するは古く志するもの

一 母衣ホロの事 三代實錄卷七清和天皇貞觀十二年庚寅三
月十六日戊辰の記に云從五位下行對馬守小野羽臣春風
進起清二事其一日軍旅之儀ウケケ在介胃ハツキ助
以保侶キヌ志清シ造調布保侶衣千領以備不虞ハツキ不虞ハツキ
守也起請トハ願ヒ書也軍旅ハイクサ也介胃ハヨロヒ也調布ハツキ又ノト
ヨミテ百姓ヨリ年貢ニ上ル布也千領ト領ノ字付ルハ保侶モ身ニ著ル
モノナレバ衣ニ准シテ幾領ト云也領ハ正リ也不虞ハ思カケズ不意ノ
事ヲ云此起請ノ意ハスベテ軍ノ支度ヲ設ル度ハ甲冑ニ在リタ

トハ甲冑ハウスシトモ保侶ヲ以テ甲冑ノ助トスシ保侶ヲ以テ甲冑
ヲ助ルワケハ保侶ハ布ニテ作ル物ニテヤワラカニヒラメク故此ホロニテ
矢ヲ受ケ止レハ矢ノ強キ勢ヌケテ甲冑ヲ射ヌクフナラヌ故ホロヲカ
フリテ矢ヲ防ダバ甲冑ノ助トナルナリソレ故百姓ヨリ年貢ニ納ル布ヲ以テ
保侶衣千領ヲ作り置テ新羅百濟高麗等ノ国ヨリ不意ニ詔從之
押寄モ来ル時ノ用意ノタメニ仕リタキト願ヒ申シタルナリ
以太宰府庫布造充之詔ハ天子ノ仰也從之トハ春風カ申上タル旨
ニマカセラレタル也太宰府ハ筑前国ニアル役屋
敷ニテ異国ヨリ攻メ来ル軍ヲ防クヘキ爲ニ建置ル役屋鋪也造充之ト
ハ太宰府ノ庫ニ納メ置タル布ヲ取出シテ保侶衣千領ヲ造リテ不意ノ
用意ノ爲ニセヨト ○璫囊抄ニ天文元年壬辰二月三日 釈氏基比丘ノ
增補シタル書增補以前ノ本書ハ觀
勝寺行卷ノ作ナリ 云孩兒在母胎内時戴胞衣以防諸毒也亦武
士臨戰場時被纓以防敵矢蓋是胞衣消毒喻之以此
母衣共書トソ申侍ル者也 ○下學集文安元年甲子 云孩兒
東山ノ秋門ノ作 在母胎時頭戴胞衣以防諸毒也今武士臨戰場時戴纓

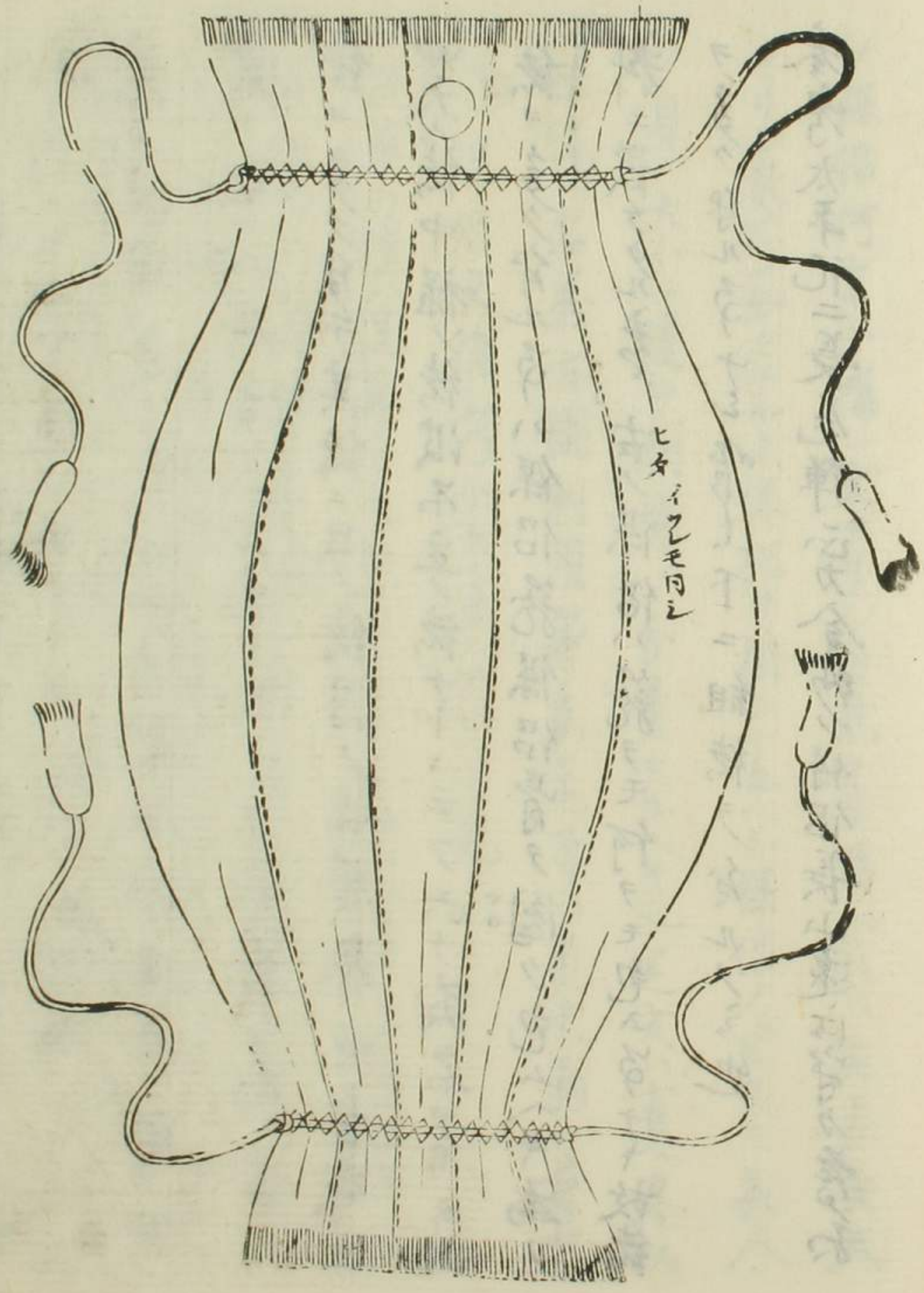
古ノ矢軍ナリシ
故母衣ヲ用タリ
後代鉄炮流リ
テ矢軍ハトキ
故母衣ヌタレテ
用ヒ方ヲモ知ラ
スヤウニナリタ
ルナリ

以向敵蓋喻胞衣防毒也被纓トアルモ戴纓トアルモ
詞ハ遠トモ意ハ同シ事也 ○貞丈云右三代
實録璫囊抄下學集等ノ文ヲ以古代ハ母衣ヲ被テ矢ヲ防
キシ事ヲ知ルヘシ後代ニ至テ此用ヒ方ヲ忘ラヌシテ籠ナトヲ包テ
差物トナシ昔ハ包ムニ依テ
サシモノ
可クニ多ク付タル也 古代ニ違ヘリ或ハ母衣ヲカクレハ災
難ヲ免ルナド、云テマシヒ物ノ如クニ思ヒ或ハ々々武志ノ飾リニ
用ル者ナド、云フハ皆散賣ヲ知ラサル力故ニ母衣矢ノ防ト
云フ事ハ貞丈始テ考得ナリ古書ナリ叶ヘリ
○光大曰貞丈翁の家ヲ傳レリ云保侶の制を著する書
あり其制地ハ鐵多ノ生絹布也練タルモ人ノ好
任スズ唐物ハ所免ニテ用ル唐物トハ唐ヨリ渡リ来タル紋物
汝落ナリノ類ヲ云街免トハ將

軍家ノ御 長サ五尺八寸五幅ノ或ハ三幅ノ大小ニ随フ布式
 免ヲ云 ^{イッ}ハ五幅ノ堅ノ両端一寸二分緯糸ヲ接去テ緯糸ヲ強シテ
 總ノ如クニスヒダヲ取ル百両方ニテ十重一方ニ五重ノ端ヨリ
 一尺二寸退テ其ヒダノ如ク組緒ニテ三寸計ノ間ヲ隔テ千
 ドリカケニ刺シ縫フ両方一モニトメ組ム也 ^{スキイト} ^{タテイト}
 ノモ一筋五刺シテ千ドリカケヲスル 糸ノ色人ノ好ニ任スベシ
 紫ハ憚ルヘシ千トリカケニサシタル依ノ間ニ別ノ組緒ヲ
 貫通シテ両方ニテ結フ之依ノ端ニ總ヲ付ル家ノ役付
 ルニハ千ドリカケノ外ノ方ニ付ル之左ニ圈ヲアハス

此大曰は左右ノ幅
 ノ端ノ肩上ノ左右
 一カミテ取合セテ
 モロカキニ結ヒテ結
 糸ル輪ニニササネ
 フヒトニニテニツサ

緯糸ヲ
 接去ル
 上下同
 故



二組テ體骨ニ色
置也下諸ハ腰也
テ前ニテ結苗置リ
故ニ馬ヲ馳セハ自ラ
風ヲ含ミテ袋ノ如ク
ナル也又ハ下ノ緒ヲ
結苗ニテ風ニ飄
リタル体モ古画見
タリ敵ノ飛箭ニヒ
シキ場ニ進ムニ腰ニ
苗ヲハ緒ヲ解テ保
侶ヲ背ノ上ヨリ馬ノ
頭辺ヲチカフヲヤ
保侶ノ裾ヲ弓ニテ
張出シテ矢ヲ防キ
カラ進ム也平家物語
一ノ谷合戦ノ条ニ云餘
十山足ヤスメ我身モ
患ツカントテ引退ク
時ハホロカナリ落
ルル時ハ目も

右ハ伊勢家ニ傳リタル制式之母衣也古今同カラス古ノ
制ノ内ニモ少々遠フ所アル也近代ノ制尤極ナリ母衣
龍母衣骨等ノ制ハ村井昌弘ガ單騎要畧ノ被甲篇ニ
載テ既ニ刊行シタルハ是ヲ記ス一不及近代ノ制ハ變ニ
依ラ多ク付テ其結ニ日ノ結月ノ結勝敵ノ結奮威ノ結
四天ノ結中祿ノ結波不立ノ結ナド、云フ六ヶ名アリ此
結ヲ多ク付ルヲハ保侶龍保侶骨ヲ圖ク包ムヘキ為ノ
料ニ設ケタル也古ノ保侶ハ龍ヲモ何ヲモ包ムヲキ故結
ヲ多ク付ルヲナシ唯上下ニ組結ヲ付ルノ也
一參考太平記ニ長尾彈正方金紗ノ保侶長山遠江守カ着お

オイテカカ入ニ
又云龍源太カ
時ハ旗ヲサケ母衣
カケリ時ハ旗ヲマキ
ホロカニキテタリ
著ク戦ケリ云々
本草紙ニ云當時
母衣ヲカクル事不
可然事也我カ心ヲ
三度モ心見テ心程
フシツテカクル也
スヘカラス但巴カ
先祖ノ重代ノ母衣
傳タリ人ハ母衣袋
ニ入テ首ニカケヘ
シ云々先大日本草
紙ノ意母衣カケニ
ハ我心ノ勇健ヲ
顯テ飛箭ヲ犯ス死
戦ヲトクキ勇猛ノ
心アラハ母衣カケ
ヘシ又母衣カケト
カラ飛箭

ノ保侶何レモ十幅一丈アリシ由見タリ兩人共ニ其身長大
ナリシ故太ノ如クナル大保侶ヲ掛シナルヘシ保侶ノ寸尺モ其人
ノ身ノ大小ニ隨テ相應ノ分量アルヘキニ定式ハ有ヘカラス
保侶ノ名義古圖利用等番シキリハ貞丈翁ノ著サレ
タル保侶衣推考ト云書ニアリ可見
一洗革の禮ハ洗革マておどろく事
一武士出陣の時供の者ハ襦ヲ持てる信長吉吉の時代
より合戦ハ侍ハ必襦ヲ以テ戦スルハ武功ハあらず
一番襦をけしめしするものなりおどろく襦を持てる
ものなり威風凛々室町將軍の頃ハ京中の出行式正の時

札一ツ見え義家の禮根札一領見え又應仁記は朱れ
の具是と云るあり吉野山吉水院より形一禮の内は朱れ
一領ありけり古代の禮皆是れ之者深きも不見あり

一 矢筈頭の札古書に八百一ツあり之吉野山吉水院より形
古禮は紺糸威にて是れの矢筈頭の禮あり古代は札の形
割小札を式とす矢筈頭の禮ハ遠き昔の物なり
ありきり

一 諸具是と云ハ太刀をもちしつを付けり持るを禮
具是と云と伴禮者具記に是れ又後二年合戦禮
は此所の人見えり此所禮者付けた刀をもちし

を付るを持ちし是禮具是と云又太平記は關東大
勢上流系より小なり腹帯と云ふと云ふ中書
百人とあり是ハ小なりと云ふ腹帯と云ふと云ふ是具
是と云ふ何れも禮きり時ハ禮具是といふなり

一 弓矢のより出陣の事應永年中云族は或ハ腰ぎしありあり
ありありと云ふ腰山旗のより腰小旗ハ山き旗より
上へ紐を付て腰より付て是ハおるに背旗のよりは
又腰ぎしありありと云ふ有ハおのふきき旗は紐
を付て腰より付て是ハおるに背腰ぎしと云ふ又
ハおるにありありと云ふ

一古の侍ハ弓矢をもちて高名せし武士を弓取といふ
後代ハ銃をもちて高名せし武士を銃取といふ（きん又
古ハ弓矢を侍の身一の道具といふ）
也（調度といふ道具の身一の道具といふ）
す（銃の身一の道具といふ）

貞丈雜記卷之十



